世界放浪の果てに

ヒッピーからハッピーへ

五〇代牧師の回想録

永山進

東宣社

序文

「神の恵みによって、私は今の私になりました」。（聖書）

日本人の男の平均寿命が、七八才といわれる昨今ですが、五〇才を過ぎると「あと何年、生きられるのかな」と思う事があります。そんな時、過ぎし日、特に二〇代の放浪生活を思い起こすと、懐かしさと共に、主イエスの不思議な導きと恵みに圧倒される思いです。

若い時には「自分の力で生きるんだ」と、考えていた時もありましたが、今は、ただ神の恵みによってのみ生かされている事を実感します。こんな私がクリスチャンであり、牧師であるという事は、神の憐み以外の何物でもなく、まさに奇跡です。

遅かれ早かれこの世を去る身ですが、こんな小さい者の上にも現わされた救いの恵みを書き記す事によって、一人でも多くの方に、神の愛を知っていただけたら、との思いが与えられ、拙いものではありますが、一筆したためました。

この本を、私を信仰に導き支えて下さった中野牧師御夫妻、田辺姉を初めとするサンロレンゾ教会の兄姉、また、私の献身のために犠牲を払ってくれた義兄の永山和一氏、私が牧会する教会の兄姉、そして、日頃苦楽を共にしている愛する妻や、発展途上中のひとり息子へ、心から感謝を込めて捧げます。

二〇〇二年五月二五日

目次

第一部　日本脱出

天からのひらめき　7
いざ行かん，ヨーロッパへ　10
初めての異国の地　12
ストックホルムでの苦楽　15
ついに皿洗いの仕事　見つかる　16
ヒッチハイクの始まり　19
スカンジナビア半島　最北端の地を目指して　20
ノースケープに到着　23
一路南下、目的地（あて）は無し　24

第二部　果てしない放浪の旅

ヨーロッパ本土に到着　25
ヤッホー！スイスだ　28
再びドイツへ　29
悪運尽きる　30
いざ行かん、アフリカへ！　31
アフリカ大陸に立つ　33
スーダンにて　ヌビア砂漠の満天　34
高地　エチオピア　34
ケニアにてライオンの恫喝　最初の命拾い　36
ウガンダにてカバに追われて九死に一生　二度目の命拾い　37
聖地イスラエル　38
摂理の出会い　42
二度目のひらめき　44
再びストックホルムを目指して　45

一年ぶりのストックホルム　46
ロンドンでも皿洗い　47
いざ行かん、アメリカへ！（六年間に及ぶアメリカ暮らしの始まり）　49
イリノイ州の片田舎を目指して　53
感激の再会　54
一路 カナダのバンクーバーを目指す　57
三度目の命拾い　58
バンクーバーには着いたものの　60
サンフランシスコを目指して　62

第三部　人生の転機

五年間のサンフランシスコの生活スタート　63
サンフランシスコでの最初のハウスボーイ　64
日本食に誘われて　65
俺が教会へ？？　68

俺、洗礼受けちゃった！　71
苦悩の日々　74
不思議な体験　75
びっくり仰天の喜び　80
俺、何を言ってるんだろう？　84
足掛け八年ぶりの日本　即、東京聖書学院に入学　85
三十才にして、また一年生　86
目の前が真っ暗になる試練　88
神の細き、しかし、確かな御声　89
無事卒業、結婚、牧師としての一歩　91
（追想）　万事を益に　93
第四部　聖書からの話・・「あなたの若い日に」　97

第一部　日本脱出

天からのひらめき

「あっ、そうだ。外国へ行ってみよう。日本でだめなら外国があらぁ～な」。それは、突然のひらめきだった。

中学生になった頃から、「人生とは何ぞや。死とは？・・」と、いっぱしの哲学者のようなことを考え始めた。また、学校での授業中は、「何の為に勉強しなければならないのだろう」、と悶々とし、空に浮かぶ雲を眺めている事が多かった。

昔の悪友は、そんな私を、「お前その顔で、そんな事考えていたのかよ」と言った。しかし、顔はどうあれ、人は悩む時は悩むものだ。

そんな日々を送っていたが、〈こんな思いも就職して、自分の好きなように生きることが出来るようになれば、吹き飛んでしまうだろう〉と、たかをくくっていた。

高校の卒業式を一日千秋の思いで待ち焦がれ、卒業と同時に、「もう学校は真っ平」と、田舎を飛び出し、東京にある某会社に就職した。

入社して半年は仕事を覚えることに熱中し、あっという間に過ぎ去った。しかし、それから再びあの哲学的問い、「人は何の為に生きるのか、はた又、人は何のために働くのか・・・」と言う思いが、頭をよぎるようになった。

日頃から「困った事があったら何でも相談に来いよ」と、言ってくれた先輩がおり、本当に困ってしまったので、行って相談した。「先輩は何の為に働いているのですか？ 人生の目的って何ですか・・・」。すると先輩いわく「そんなこと考えたって、腹の足しにもならんだろう」。

「腹の足しの問題じゃないんです。生きがいの問題なんです」。――〈ブタじゃあるまいし、腹がいっぱいになりゃ良いって問題じゃないだろう〉 ――と、言いたかったが、酒と一緒に飲み込んだ。

「そんな大切なことも分からずに、よく生きていられますね。先輩は、自分の人生に満足してるんですか？・・・」。すると、先輩は少し嫌な顔をした。が、返事はなかった。しばらくして「まっ、そんなに深刻になるな。酒でも飲め」と、色々慰めてはくれたが、ちっとも解決にはならず、頭がガンガン、二日酔いだけが残った。

時には同僚と酒を飲み明かし、時には山へ海へと出かけ、気が紛れることもあったが、ふとした時に〈俺の人生これでいいのか〉と、心に隙間風が吹き抜けるような空しさを感じた。

〈こんなはずじゃない。俺の人生、こんなもんで終わってたまるか。俺にはもっと違った生き方があるはずだ。それは何だろう・・〉と、色んな職業を思い浮かべてみたが、自分にぴったりした仕事が思い浮かばなかった。

就職して四年目。夢も希望もすっかり砕かれ、鬱々とサラリーマン生活を送っていたある日、友人と二人でコンピューターによる職業適性検査を受けに行った。

十日ほどして検査結果が届き、早速友人のを開いてみた。

「あなたには、管理職が向いています」とあった。

「オッー そうか。やっぱしな」と嬉しそうだった。 ドキドキしながら自分の封を開いた。

「・・・・・・・・・・・・・」

「あなたには、ふさわしい職業が見当たりません」とあった。

「・・・・・・・・・・・・・」

一瞬、二人の間を、冷たい風が吹き抜けたような気がした。

〈そんなバカな。ひどすぎる。神も仏もないのか〉と、どこにもやり場のない憤りを感じた。

そんな事があった後の会社での昼下り、ボンヤリ空に浮かんだ小さな白い雲を眺めていた。その時、天から、あの不思議な「外国へ行ってみよう」と言うひらめきが与えられた。

――今、思い出しても、あの時のひらめきは、自分の人生を根底から変える神の恵みの始まりだった、と感謝せずにはいられない。――

いざ行かん ヨーロッパへ

ひらめきが与えられ、心はいっぺんに外国へと向った。アメリカにしようか、それともカナダへ・・・。いろいろ迷ったが、色んな国が見られるかも、と言う単純な理由で、ヨーロッパへ行く事に決めた。

一九七一年五月一二日午前十一時、横浜の大桟橋から船に乗り込んだ。

見送ってくれたのはI君ただ一人。誰が投げたか分からない紙テープをしっかり受け止め、不安と期待に胸を膨らませながら、ドラの音と共に旅立った。

――聖書に、「信仰によってアブラハムは・・・行き先も知らないで出て行った」（ヘブル

一一・八、以下口語訳)とあるが、その時のアブラハムの心境など知る由もなかったが、少なくともアブラハムには信仰が有り、愛する妻や、多くの従者達もいたようだ。何より、最も頼りになる神の導を確信していたはず。――
しかし、私の場合は、信仰も無ければ従者も、もちろん妻もいない。共通しているのは「行き先も知らないで・・」と言うことだけだった。

船は「バイカル号」という五千トン位のロシア船だった。名前はロマンチックだが、至る所ペンキが剥げ落ち、ドアはへこんでいたりで「沈没しなけりゃいいがな…」と、不安に駆られた。案の定、船は揺れた。私の将来を暗示するかのように。
乗船客には様々な国の人がおり、さながら人種のるつぼのようだった。
その中には、ヨーロッパに向かう日本人も、思いのほか大勢見られた。フィンランドのヘルシンキ迄はパックツアーの為、団体旅行のようだった。
しばらくすると、お互いに親しくなり、そこかしこで自己紹介やら、他己紹介が始まった。
「あなたはどこまで？」
「わたしは、ウィーンに音楽の勉強にいくの」と、誇らしげに応える若き女性もいた。
「俺はロンドンで英語をマスターしようと思って・・」

「わたしは、ドイツに居る娘に会いに行くところ」と、しばらくは皆の言うことを聞いているだけだったが、とうとう私に質問してくる者がいた。
「あなたは何処まで？」
「・・・・・・・・・」
「ハアー 決まっていないんです」
「えっー、決まっていないの！・・？」
「何日くらい行ってるの？・・・」
「・・・・・・・」
「それも・・ま～だ・・」
「えっ・・それもわからないの？・・・」と、驚いた風に首をすくめ、
「それもロマンチックネー」と、付け足しのような言葉が返ってきた。

初めての異国の地

二日がかりで船はようやくナホトカに着いた。生まれて初めて踏む異国の地である。先々の

不安はあるものの、兎にも角にも、日本を脱出した。
数時間後、列車に乗り換え、ハバロフスクへ向かった。行けども、行けどもただ荒涼とした風景が続くのみ。眺めている私の心もスースーとしてきた。と同時に「やっぱし世界はでっかい」と体感した。

五月十五日午後二時四十五分。ハバロフスク空港よりモスクワに向かって飛び立った。あいにく雲が立ち込めていて下界は見えない。しかし、上を見上げると、太陽は燦々と輝いていた。太陽と鬼ごっこの空の旅は六時間ほど。しかし、時差の関係で四時三十分にモスクワに着いた。
「メトロポール」と言うホテルに泊る事になっていた。行って見ると、完全に名前負けしているホテルだった。
部屋の階まで行くと、そこには苦虫を噛み潰したような顔をした五十代前後の女の従業員が椅子に座っていた。どうやら人の出入りを見張っているようだった。
「スパシーボ　(こんにちは)」と、挨拶したが、「ウン」とも「スン」とも言わない。話なんかしても腹が減るだけだ、とでも思っているかのようだった。
部屋に荷物を置き、気分を取り直し、まだまだ明るさの残る街に出かけた。

クレムリン宮殿を見ながら、「赤の広場」をそぞろ歩く。さすがに異国情緒たっぷりだ。いつの日か新婚旅行でこんな所に来たいものだと、束の間の夢心地を楽しんだ。街中を歩きながら「思えば遠くへ来たもんだ」と、不安が一瞬心をかすめる。

五月一六日午後一一時四〇分。ヘルシンキに向かう夜行列車に乗る。途中レニングラードを通過。窓外の景色は、相変わらず延々と原野が続く。「イヤー、こんな風景もそろそろ飽きたな。日本の可愛らしい景色と、味噌汁が恋しいよ」と、早くも日本人の旅行者の間から、つぶやきが聞こえる。

五月十七日。白夜の国北欧の東の玄関口、ヘルシンキに到着。これからはいよいよ一人旅の始まりだ。

ヘルシンキの港からスウェーデンの首都、ストックホルムへ向かった。片言の英語で、港までの道順を尋ねるが、何度教えられても聞き取れない。

“Pardon me, Excuse me”を何回も繰返していたら、「おまえ、馬鹿か」と言いたげな顔をしながらも、親切に港まで連れて行ってくれた。やっぱり何とかなるもんだ。

ストックホルムでの苦楽

五月十九日。 目的地のストックホルムに到着。街のそこかしこに入江が見られ、かもめが優雅に飛びまわるその風景は、まるでアンデルセンの物語に出てくるおとぎの国のようだ。「ワッー、スゲー！ ムッチャクッチャきれい。遠くまで来た甲斐があった」と、心底そう思った。その美しさは、今でもはっきりと脳裏に焼き付いているほど。

日本を発ってから、早や一週間。いや、まだ一週間か。持ち金は早くも底を突いた。いや、元々、ストックホルムまでの片道切符と、少しの現金しか持っていなかった。今、振り返ってみると「何を考えていたんだろう」と身震いする。「神（カミ）」もなければ「カネ」もない状態なのに・・・・。

ただ、「何とかならぁ～な」、の心意気でここまでやって来た。―― この持って生まれた性分は、牧師となった今でも色濃く残っており、しばしば家内とぶつかる要因でもある。ちなみに、家内は、石橋を叩いて叩いて渡らないタイプである。――

しかし、そうそうのん気に構えてもいられない。 早速、寝る所と仕事を捜し始めた。

「ここまで来て、そう簡単におめおめと帰れるか。何としても三ヵ月は頑張るぞ」と心に誓った。

翌日からストックホルム市内や、郊外のレストラン、工場を、それこそしらみつぶしに、毎日毎日片っ端から訪ね歩いた。五月とは言っても、ひとたび天気が崩れると、日本の真冬並みの寒さに逆戻りしてしまうのには参った。

人生の目的を求めてやって来たヨーロッパであったが、それより、まず食べる為の仕事を求めなければならないところに、現実の厳しさを感じた。

後に、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ四・四)と言う、聖書の言葉を知ったが、この時は、ただひたすらパンだけを求めて歩き回った。残金を節約するために、食事は(?)は毎回フランスパンとミルク。ホトホトうんざり。ゲップをするとミルクの臭いがした。

ついに皿洗いの仕事が見つかる

六月七日(月)。職探しを始めて十八日目、ようやくストックホルム・セントラル・ステーションのカフェテリアで、皿洗いの仕事が見つかった。手持ちのカネは、わずか数十ドルとなっていた。

――この時にも、すでに神の守りと導きがあったのだと、信仰を持ってから分かった。――

時給（一九七一年当時の日本円で）六〇〇円。一日中、中腰で立ちっぱなしはきつかったが、辞めるわけにはいかず、唯ひたすら皿を洗いまくった。

その職場には、モロッコ人やトルコ人が、数人働いていた。彼らのチンタラ、ノロノロ、ペチャクチャの仕事ぶりにはホトホトいらだった。

「オイッ そこの唐変木（とうへんぼく） サッサと仕事せんかい！」と言うと、日本語の意味は分からなくても、何となく怒られていることは分かるらしく、少しの間真面目に働いた。しかし、国民性は、ちょっとやそっとでは変わるはずもなかった。むしろ「お前はどうしてそんなに一生懸命働くんだ。もっと休め」と言う始末。「日本人は働き過ぎるのかなー」と、考えさせられた。

現地の言葉を話せなくても雇ってもらえる皿洗いの仕事は、それから以後の放浪生活を支える主要な仕事となった。

アルバイトの合間に、時間を作って色んな所に出かけ、様々な国々の人々と会った。その一人にアメリカン・インディアンがいた。キョロキョロしながら街の中を歩いていると、反対側からただならぬ雰囲気の人物が歩いてき来た。目を合わせないようにわざと横を向いて歩いていたが、運悪くカチッ、と合ってしまった。〈アッ、まずい〉と、思ったが後の祭り。

つかつかと寄って来て「一緒にお茶でも飲もう」と誘ってきた。テレビではよく見たことのあるアメリカン・インディアンの風貌だったが、生のインディアンは初めて見た。何となく興味もそそられ、一緒に近くのカフェテリアにはいった。“I can not speak English very well”と、再三断ったが、それさえ通じないのか、一人でベラベラ立て板に水のごとくまくしたてた。どうも、何かを訴えているかのようだった。小一時間聴いていて、ボンヤリ分かったことは「アメリカは、元々俺たちインディアンのものだ。それを、白人が無断で押しかけて来て奪ってしまった。おれは革命を起こして、それを取り戻したいんだ」と言っているらしかった。〈そんなこと俺に言われても困るよ〉と思いながらも、〈なるほど、その様な歴史観もあるのか〉と、同情の素振りをみせた。折角のアイスクリームの味は、何故か水っぽく感じた。てっきりおごってくれるものと思っていたが、自称革命家は、話すだけ話すと、さっそうと出て行ってしまった。自分の飲んだ分さえ払わずに。

〈ああいう図太い神経でないと、革命は起こせないのかもナ――〉と、妙に感心した。

ストックホルムの街の美しさに魅せられ、〈この国には、きっと自分の求めている何かがあるはずだ。生き甲斐となるようなものが・・〉と期待で胸が高鳴った。しかし、三ヶ月も経つと、その期待も段々薄れ、失望に変わって行った。

やがて三ヶ月の滞在期限も迫って来た。「スウェーデン語を学びたい」と言えば、多少の延期は可能であったが、学ぶ理由も見出せず出国することにした。三ヶ月弱の皿洗いで貯えた所持金は、約千ドル（当時一ドル　三百円）だった。

――それから足掛け八年に及ぶ、放浪と探求（？）の外国暮らしが始まろうとは、その時、夢にも思わなかった。――

ヒッチハイクの始まり

八月二〇日、ストックホルムの郊外まで電車で行き、そこからノルウェーの首都オスロに向かうことにした。最初は、タダで車に乗せてもらうことに〈武士の恥、大和魂を汚す〉等々、多少の抵抗はあったが、そんな見栄も一時間もしたら、どこかへ吹っ飛んでしまった。

ヒッチハイクに格好の場所には、アメリカ人、ドイツ人、オーストリア人、はた又ヒッピー崩れの国籍不明人、と国際色豊かだった。その中には女性のヒッチハイカーも何人かいた。どういう訳か、女性の所にはすぐ車が止まる。こちらは「オーイ。止まれ、止まれ、止まっ

てくれ！」と、さかんに手を振り、足を振ったりしてみたが、なかなか止まってくれなかった。結局一時間も手を振り続けた。

「ウーマン・リブ反対、絶対反対！」と、心の中でわめいた。

それでも車を六台乗り継いで、日も暮れかかる六時少し前に、ようやくオスロに到着。しかし、信じられない、本当に信じられないことに、スーパー・マーケットはすでに閉じられていた。日本では絶対ありえないことだ。又々、空きっ腹を抱えて寝ることになった。グーグーなる腹の虫をだましながらの野宿は何とも惨めなものだ。―― 今でも食事は、目の前に量がたっぷりないと不安を感じるのは、こんな体験が尾を引いているのかも？ ――

〈アーアッ。可哀相なボク・・〉。世界中で自分が最も不幸な人間に思えて来た。しかし、長距離をヒッチハイクしたせいか、体は芯から疲れていたようだ。朝七時頃まで熟睡する。

スカンジナビア半島最北端の地を目指して

オスロには二日ほど滞在し、ノルウェーの最北端ノース・ケープを目指すことにした。そんな所に行っても人生の目的を発見出来るとは思わなかったが、行かなければ一生後悔する

ような気がした。
ただひたすら北に向かった。車を何台も何台も乗り継いで。
時には一日中待っても、一台も止まってくれないこともあり、そんな日は自分で歩いた距離だけしか進めなかった。道路の傍らに野宿したり、朽ちかけた小屋（トナカイの番人用か？）に潜り込んで寝たこともあった。
　ある晩、暖かそうな草むらに寝袋を広げ、疲れ切った体を横たえ、眠っていた。すると真夜中ごろ、「カサカサ」と、寝袋の足元をまさぐる音がした。息を潜め〈・・何でこんな所に、コソ泥がいるんだよ？？〉といぶかりながら「こらっー」と大きな声で叫んだ。犯人は吹っ飛んで逃げ去った。野生のトナカイだった。
　野宿々々の連続で、お風呂どころか、シャワーすら取らない日が何日も続いた。「ウッ 臭〜い」。自分で自分の臭さに閉口した。しかし「垢で死ぬ人はいない」という言葉は本当だった。
　北へ上れば上るほど、木々はまばらになり、風景が寒々としてきた。北緯六十五度を過ぎた頃、まだ八月下旬だというのに、小高い丘にはうっすらと雪が積もっていた。私の心も益々寒々となって来た。「今、自分がやっていることが、将来何の役に立つのだろうか。日本に帰ったら何を為すべきなのだろうか」、との思いが心によぎる。

この頃から、よくラジオやテレビから流れていた「北帰行」の歌が、いやに胸に響いてくるようになった。

窓は夜露にぬれて　都すでに遠のく
　北へ帰る旅人ひとり　涙流れてやまず。

夢は空しく消えて　今日も闇をさすらう
　遠き想い　はかなき望み　恩愛我を去りぬ

今は黙して行かん　何をまた語るべき
　さらば祖国　いとしき人よ　明日はいずこの町か

ノース・ケープに到着

九月五日、オスロを出発して一五日目。ついにノース・ケープに到着。北緯七十一度（ちなみに稚内は北緯約四十五度）。スカンジナビア半島の最北端。これより北には北極があるのみ。そう思うと雨混じりの北極からの風がやけに冷たく感じた。

何とか目的地には辿り着いたが「さてこれからどうする。こんな所じゃ生きて行けそうにないし・・・」と、またまた空きっ腹を抱えて悩んだ。腹の虫だけは「グーグー、ギャーギャー」元気だった。そこに辿り着くまで、まともな食事らしい食事をとっていなかった為、半分飢餓状態である。そこにも観光客相手の小さな店があるにはあったが、日曜日のため閉まっていた。

「お～い、客がいるのになんで店が閉まってるんだよ～」、と文句を言ってみても、店は一向に開く気配はなかった。日曜日に店が閉まっているのはキリスト教の習慣から来ているという事が分かった。やがてキリスト教に反発を感じるようになったのも、飯の恨みからか？？

早く暖かい物価の安い国へ行って、腹一杯食事をしたいと、食べることばかりが頭をよぎった。まさに餓鬼のような心境。人間の尊厳も何もあったもんじゃない。

一路南下・・でも目的地（あて）は無し

日本を発って早や四ヶ月。ノース・ケープからフィンランド経由で、一路ドイツを目指すことにした。途中、親切なフィンランド人の家族と知り合い、サマーハウスに招待された。何十日ぶりかの本格的なディナーと朝食に、人生の無上の喜びを感じた。と同時に、そういう自分の浅ましさに、何とも言えない寂しさを覚える。

フィンランドは森と湖の国と言われるだけあって、言葉に表せない程の感動の連続だった。

第二部　果てしない放浪の旅

ヨーロッパ本土へ

一九七一年九月二七日（月、曇）。デンマークからフェリーで、ドイツのハンブルグに到着。

アウトバーン（ドイツの高速道路、当時はスピード制限なし）には度肝を抜かれた。あの悪名高いヒットラーが、いざとなったら飛行機の滑走路にも使えるように、と造らせたと言われるだけあって、所によっては幅百メートル近いところもあった。そのアウトバーンがドイツを縦横無尽に走っている。――ヒットラーも道路の建設と言う点では国に貢献したのかも？――そのアウトバーンは、私のヒッチハイクにも大いに貢献してくれた。

ハンブルグから南に向かってヒッチハイクしている時、ちょっと変わった様の車が止まってくれた。乗せてもらうのにためらいを感じたが、よく見ると四、五歳の男の子がいたのでホッと一安心。彼らはジプシーだった。親切にも、「今晩 うちへ泊れ」と言ってくれた。質素な夕食だったが、なんだかとっても嬉しかった。わずかばかりの日本の硬貨を、その男の

子にあげたら、こちらが恐縮するほど両親も喜んでくれた。

九月三十日（木 晴） パリに向かって出発。運良く大型トレーラーがすぐつかまった。人の良さそうな、おっちゃんだった。

“I want to go to Paris”（パリへ行きたいんだけど）、と言うと“Yea , Yea ”と応えてくれた。男には珍しいほどのおしゃべり。残念ながら、ドイツ語しか話せないようだった。しきりに話しかけるので、「イッヒ カン ニヒット スペレッヒン ドイチェ（俺、ドイツ語は話せないよ）」と、覚えたてのドイツ語で言ったつもりだったが、相変わらず“Yea, Yea ”と言うばかりで、分かってるのか分かってないのか、ちっとも分からなかった。仕方がないので日本語と片言の英語で、適当に相づちを打っていた。その内ものすごい睡魔に襲われ眠ってしまった。

しばらくすると「着いたから起きろ」と言う。寝ぼけ眼をこすりながら、辺りを見渡すと、やたら風車が目に入った。

〈パリにもこんなに風車があるなんて、ちっとも知らなかった。やっぱり百聞は一見にしかずだ〉と思っているうちに、人の良さそうなおっちゃんは、私を残して出発してしまった。

「？？……？？？…」。

通りがかった女の子に聞いてみた。
「ここはパリ？」。
「？？・・？？ ノー、ノー、ここはアムステルダムよ」。・・・
・・・・・・・・
やっぱり、ちっとも通じていなかった。やむなく、二日ほど滞在し、〈そうだ、『ベルリンの壁』を見て来よう〉と思い立ち、急遽ベルリンへ行くことにした。どうせ宛ての無い旅なのだから。
・・・この頃から「何でも見てやろう、どこへでも行ってやろう」と言う好奇心と野次馬根性が芽生え、益々放浪生活にはまっていった。

運良く捕まえた高級ベンツと数台の車を乗り継ぎ、ベルリンへ到着。
観光の通行許可を貰い、長い地下道をくぐり、東ベルリンへ行った。
同じベルリンでも、西と東ではこうも違うものかと愕然とした。店の看板や広告もほとんど見当たらず、共産主義国独特の殺風景な街だった。
「ベルリンの壁」の上を、銃を持った東ドイツの兵士が、何人も行ったり来たりしながら、四六時中見張りをしていた。東から西へ脱出しようとすると、たちまち射殺されると言うこ

とが実感できた。同じ民族が敵対関係にある悲劇と、イデオロギーの限界を深く思わされた。やりきれない思いを胸にスイスに向った。

ヤッホー！スイスだ

十月十七日（日 晴）。「アイガーの北壁」で名を馳せたグリンデルワルドに到着。「アルプスの少女ハイジー」がどこからか現れるのでは、と思うほど可愛らしい町だった。こんな所で、牛を飼いながら、のんびり一生を過ごすのも悪くないな・・結婚して永住しようか、と真剣に考えたほどだった。しかし、〈もっと素晴らしい所があるかもしれない〉と思い直し、世界の明峰マッターホーンの町ツェルマットやモンブランの在る北フランスの町、シャモニーへと巡り歩いた。

再びドイツへ

十月三十日（土 晴）ドイツのデュッセルドルフへ到着。日本を発って五ヶ月。髪も伸び放題。「生き甲斐を求めて」と言う崇高な目的を持って日本を飛び出したはずだったが、今や見るも無残。ルンペンかヒッピーか？？ 所持金も底を突いてきた。早く仕事を見つけなければ、生き甲斐どころか、冬を越せずに野垂れ死にしかねない。早速、例のレストランめぐりを始めた。しかし、すでに時遅し。どのレストランも雇ってくれなかった。「何とかなるさ」の心意気も失せそうだった。

しかし、幸いなことに、そこのユースホテルで知り合った日本人から、銀細工の仕事を教えてもらうことが出来た。見よう見まねで、必死に針金をこね繰り回した。何とか売れそうなネックレスや、ブレスレットが作れるようになった。

初めは、私が制作に専念し、旅の間に知り合ったW君が、セールスを担当することになった。皿洗いよりずっとカネになる。が、良いことはそうそう続かないものだ。コンビを組んでいたW君がポリスに捕まり、国外退去となってしまった。私が誘ったばっかりに彼をこんな目に合わせてしまったことに、申し訳なく思ったが「ま、仕方ないさ。あいつが運が悪かったんだ。それに、一人でやった方が儲けが大きくなる」と、簡単に割り切り、見捨てしま

った。――この事が、やがて私がアメリカで教会に行くようになった時、大きな良心の呵責となった。――

それからは、自分で作り自分で売ることにした。しかし、物を売ると言うことは思った以上に大変なことだ、とつくづく分かった。まず、風呂敷きを地面に広げ、そこに製品を並べるだけでも、精神的に相当なプレッシャーがかかるものだ。その上、地面にかがんで、買ってくれそうな人に声をかけると言うのは、ノミの心臓しか持ちあわせていない私には、大きな苦痛だった。なんだか自分が乞食にでもなったかのように感じられ ―― もっとも、外見は乞食と余り変わりはなかったが ――、最後までついに慣れることはなかった。

悪運尽きる

W君が捕まった一週間後、ケルンと言う町の大聖堂の前で、例のアクセサリーを売っている時の事だった。突然、商売仲間の誰かが「ポリス！」と叫んだ。それからの三秒が、天国と地獄の分かれ目。店をたたんで逃げるまでに五秒以上かかると、大体捕まる確率が高いことが、経験上分かっていた。その時は四秒かかってしまった。しかし、四秒と言うのは必ずしも捕まるとは限らない。どうもその時は、近くのデパートの店員が警察に通報したらしい

事が後で分かった。その為、取り締まりが強化され、あえなく御用となってしまった。ちなみに私達の商売は、無許可店舗、無許可労働、脱税等々、完全に違法なものだった。私と仲間数人が警察に連行され、パスポートに、でかでかと「国外退去」のスタンプを押されてしまった。一週間以内（？）にドイツを出て行けとのこと。

錦を飾って帰国するどころか、益々泥沼に落ちて行くような気がした。

――しかし、それも神の摂理の中にあったことか？――

所持金は日本円で約二十六万円ほどだった。

いざ行かん！ アフリカへ

ドイツで国外退去になった為、ヨーロッパに居づらくなってしまった。

いくらヨーロッパの国々はキリスト教国とは言っても、国外退去になった者を受け入れ、長期滞在をさせるほど寛容（？）ではなかった。

〈仕方がない。どうせここまで来たなら、いっそアフリカへでも行ってみるか。ひょっとしたら何かがあるかもしれないし・・・〉と言う思いで、商売仲間たちと一緒に、アフリカへ

行くことにした。

――日本を飛び出した時には、まさかアフリカまで放浪することになろうとは、夢にも思っていなかった。――

ユースホテルで親しくなったドイツ人のおばちゃんと、その家族の盛大な見送りを後に、涙をにじませながら旅立った。スイスを素通りし、イタリアのローマに入った。ローマと言えば、キリスト教の歴史上最も偉大な伝道者パウロが殉教した地。キリスト教にまつわる貴重な遺跡、名所が沢山あったはずだが、この時には、そんな事にはほとんど興味が無く、あてどもなくさ迷い歩いただけだった。勿論「ローマの休日」のようなロマンスは、この時は夢のまた夢。そして生き甲斐も人生の目的も、まだまだ見い出せそうになかった。

数日後、船でギリシャに渡った。途中、エーゲ海の小さな島に立ち寄り、レンタルバイクで島巡り。束の間のバカンスを楽しんだ。――そこはひょっとしたら、パウロが漂流して打ち上げられた島だろうか？――

アテネでエジプトのビザを取り、予防接種を受け、いよいよ飛行機でエジプトのカイロへと飛んだ。その飛行機の古臭いこと。第二次世界大戦で使っていたシロモノかと思ったほどだ。

アフリカ大陸に立つ

一九七二年一月某日。　九死に一生の思いでエジプトのカイロに降り立つ。そこは今までの国々とは全く雰囲気が違っていた。神秘的と言うのか不気味と言うのか、何とも形容しがたい印象を受けた。少し路地に入ると、人の糞とおしっこの臭いがプンプンしていた。子供たちは何ヶ月も体を洗った形跡もなく、薄汚れた格好をしていた。しかし、物価が安いのには大助かり。急に金持ちになった心地だ。今までは、何を食べるにも、常に値段が気になったが、その心配は三分の一になった。

エジプトでは、お決まりのピラミッドやスフィンクス、王家の谷、女王の谷等を見学。・・今から数千年前にどうしてこれだけのものを・・？！・・と、古代エジプト人の文化の高さに舌を巻いた。

しかし、どこへ行っても「ハロー、ミスター　バクシシー　（何か恵んでくれ）」と、子供たちに付きまとわれるのには閉口した。

その後ナイル河を上り、スーダンへと向かった。

スーダン、ヌビア砂漠の満天の星

乗合バスに乗って、現地の人々とスーダンのヌビア砂漠を横断して行った。行けども行けども、赤茶けた砂漠が延々と続くだけ。窓を開けようものなら、たちまち赤い砂塵が目と言わず鼻と言わず入り込んでしまう。〈現地の人達はよく我慢して、こんな冷房も無いバスに乗っていられるもんだ〉と恐れ入った。

ここで仰ぎ見た星空には、感動の余り言葉を失った。地平線から地平線にまで及ぶ満天の星々。まだ、聖書の教えている神については、全然知る由もなかったが、何かしら、荘厳な神の存在にふれたような心地がした。

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」（詩篇一九・一）と聖書にあるが、まさにその通りであった。

高地エチオピア

スーダンのカッサラからエチオピアのアスマラへ飛行機で飛んだ。飛行場に降り立つと、呼吸するのが苦しく感じた。そこは海抜二千メートル位の空気の薄い所だった。そこから更に

バスを乗り継いで、地図を見ても名前など載っているはずもない、小さな村々を経由しながら南下して行った。時には谷底を這うように、時には尾根沿いを縫うようにバスは進んだ。

隣の座席に座った現地の人が、人懐かしそうに話しかけて来た。

「どこから来たんだ」。

「日本から来た」と答えると、

「ヤーパン　ベーリー グッ 。 ヤーパン ベーリー　グッ 。 トヨタ、・・ホンダ、・・ニッサン、ベーリー　グッ　バンザーイ　バンザーイ」。

誰が教えたのか、変な日本語を知っているな、と思ったが、なんだか自分が誉められたように嬉しくなった。

しかし〈よくこんな所に人が住めるものだ。俺だったら、たとえ一ヶ月 百万円くれると言っても、とても住めないなー〉、などと好き勝手な事を言いながら、三ヶ月も巡り歩いてしまった。

この頃は、毎日毎日下痢気味の状態が続いた。水も食べ物も、我々よそ者にはうかつに手が出せなかった。風邪を引いて寝込んでしまったのも、エチオピアであった。

松尾芭蕉の辞世の句、

「旅に病み　夢は枯野を駆け巡る」を、身近に感じたのもこの時だった。

ケニアにてライオンの恫喝　最初の命拾い

更に南下し、ケニアに入った。ケニアと言えば、何と言っても野生の動物たち。至る所、ライオンやキリン、ハイエナ等が見られるのかと期待していたら、いる所に行かないと見られないことが分かった。早速サファリー用のジープをチャーターし、ライオンに会いにいった。しばらく探し回ったが、ようやく草むらに寝そべっているオスのライオンを見つけた。現地の運転手は慣れたもので、注意深く、ソロリソロリ、ジープを進めた。誰かが「もっと近づけて」と、運転手に催促した。

「そんなに近付いたら危ない。万一ドアが開いたらどうする。ひとたまりもないぞ」。

「大丈夫、大丈夫、心配するなよ」と皆はしゃいでいた。

車は三メートルほどまで近付き止まった。誰も彼も我を忘れて、夢中で写真を撮っていた。すると突然、後ろのドアが本当に開いてしまった。誰かが知らずにドアの取っ手を押してしまったらしい。ライオンがムクッと起き「ウォッー」と吠え身構えた。それに気付いた運転手が立て続けに激しくクラクションを鳴らした。幸いにも、ライオンはすったまげた顔をし、尻尾を巻いて逃げ去った。こっちはもっと驚いた。みんな真っ青。運転手のお説教を、ただ黙って頭を垂れ聞いていた。

ウガンダにてカバに追われて九死に一生　二度目の命拾い

次に、タンザニア、ウガンダへと向かった。

ウガンダには、有名なカバとワニの生息地があった。そこに行ってみると、たまたまカバが陸に上がって草を食んでいる光景を目にした。その様は余りにも愛くるしかった。カメラを片手に近づき、接写を試みようとした。二、三メートルまで近付き、いよいよシャッターを押そうとしたその時、カバの気を引こうとして口笛を吹いて、言った。

「カバちゃん、ハイ ポーズ」。所が、それがいけなかった。どうもプライドを傷付けたらしい。全然バカにしたつもりはなかったのだが・・・・・。一瞬、あの二重瞼のつぶらな瞳が「キラッ」と光った。かと思うと、突然、猛烈な勢いで突進して来た。

「アッ　ヤバイ」。こちらも猛烈な勢いで逃げた。幸いそのカバは、さっぱりした性格だったせいか、十メートルぐらい追いかけたところでやめてくれた。もしそのカバの足がもう少し長く、執念深かったら、今頃どうなっていたことやら。写真にはカバの頭半分だけがピンぼけで写っていた。

後に、あるテレビの番組で、某動物学者が「カバは怒らせると恐い動物である」と言うのを聞いて〈まったくその通りだ〉と思った。

二度の命拾い、いや命拾いの連続であったのかもしれないが、その時にはまだ神に守られていると言う思いには至っていなかった。とにかく不思議に五体満足で、約三ヶ月のアフリカ放浪も終えた。

しかし、ヨーロッパへ戻るのには、まだドイツで受けた「国外退去」のほとぼりが冷めておらず、ひとまずケニアのナイロビ空港からイスラエルへ飛ぶことにした。

聖地イスラエル

イスラエルはキリスト教徒にとっては、一生に一度は訪ねたい聖地と言われる。しかし、その時の私にとっては、単なる、ほとぼりが冷めるまでの、一時しのぎの国に過ぎなかった。いずれにしてもクリスチャンでも求道者でもない私が、思いがけず三ヶ月も滞在するようになったのは不思議な気がする。

機内から見下ろしたイスラエルは、お世辞にも美しいと言う印象は受けなかった。赤茶けた荒地に囲まれ、所々に緑が点在している程度だった。

乾期のせいだったかも知れない。

イスラエルの北方に位置する、小さな町のキブツ（生活共同体）で働く事になった。とは言っても、給料はなし。ただ、住まいと食事は支給された。

その頃(一九七二年)のイスラエルは、祖国再建の真っ最中。それこそ猫の手も借りたいほどであったのかも知れない。猫の手の代わりとして、我々のような放浪者さえ貴重な労働者として受け入れてくれた。〈ほとぼりが冷めるまでの辛抱、辛抱〉、と言い聞かせながら働くことにした。

最初は、工場で、機械工作の仕事を宛がわれた。ネジを作ったり、鉄板に穴を開けると言う、比較的単純な仕事だった。しかし、不思議な事に、私が操作する機械はことごとく故障した。

「この機械、なんだか調子が変なんですけど・・」

「昨日まではちゃんと動いてたんだけどな・・。おかしいなー。じゃ、こっちの機械でやってみてくれ。」

・・・・・・・・

しばらくすると、その機械も狂い出した。

「スイマセン。この機械も変ですよ。昨日まではちゃんと動いてたんすか？」

「もちろん動いていたさ・・・。何で、こうも次から次に、おかしくなっちゃうんだよ。まったくー・・」
「まったく、変ですよね～。前にはこんな事なかったんすか。…おかしいな、教えられた通りにやってるつもりなんすけどねー。 俺が悪いんすかねー」

何とも言わなかったが、その目は完全に「お前が悪い」と言っていた。
そんなことが何回も続いた。どうも機械との相性が良くなかったようだ。自分でもウンザリしたが、監督はもっとウンザリした様であった。

とうとう農園の方に配置替えとなった。バナナや綿の栽培であった。石のごろごろする荒れ地を、畑に変えて行く作業は大変な労働である。まず石や岩を取り除き、次にパイプを敷設して、水を引くところから始めなければならない。しかし、この仕事は私に向いていたようだ。なんせ、バナナ食べ放題が良かった。売り物にならないバナナが沢山あったから。
「こんなに捨ててしまうの惜しっすね。何とかならんのですか？」
「ああ・・ダメだね・・。好きなだけ食べていいよ。どうせ捨ててしまうんだから・・」
それからは、おやつはいつもバナナだった。

体を動かし汗を流し、バナナを腹一杯食べられる生活にささやかな幸せを感じた。そんな訳で、農園での仕事は大きなトラブルも無く、最後まで続ける事が出来た。

私が滞在している期間に、ユダヤ教徒にとっても、また、キリスト教徒にとっても、最も大切な「過ぎ越しの祭り」が催された。しかし、当時の私には何の意味も持たなかった。

滞在期限の三ヶ月はあっと言う間に過ぎた。イスラエルを離れる前に、ヒッチハイクで観光名所を廻る事にした。

エルサレム（その時は、そこが聖書で言う聖なる都であることすら知らなかった）、古代の交通の要所であり、商業都市でもあったエリコを素通りし、荒涼としたアカバ湾を訪ね、最後に、地球上で最も低い湖と言われる死海で、しばし骨休みをした。

この死海も、聖書に出て来るとは、ちっとも知らなかった。泳いでみてビックリ。顔をつけてみてドッキリ。海水がちょっとでも目に入ろうものなら、飛び上がるほど痛い。何にしろ、海水の塩分濃度は二三～二五パーセント。普通の海水の約六倍という。どおりで、手足をバタバタさせないでも、体がふんわりと浮いてしまうわけだ。浮きながら本を読んだり、写真を撮ったり出来るほどだ。

――これらを廻った事が、今、牧師として聖書から話をする時に大きな助けとなっている。

放浪生活も無駄ではなかったか ――

ドイツで、「国外退去」のペナルティを受けてから七ヶ月が過ぎた。そろそろほとぼりが冷めただろうと思い、ヨーロッパへ戻る事にした。
イスラエルのテルアビブ空港からギリシャのアテネに飛んだ。そこからトルコのイスタンブールに向かい、ブルガリア、旧ユーゴスラビアを経由し、チロル地方の美しい山々を眺めながらヒッチハイクを続け、オーストリアのウィーンに辿り着いた。久しぶりのヨーロッパに、ホッと懐かしさを感じた。

摂理の出会い

一九七二年六月十日　ウィーンから旧チェコスロヴァキアの首都プラハに、珍しく列車で移動した。
列車がプラハの駅に着き、他の乗降客に続いて降りようとしたまさにその時、反対側から歩いてきた一人の女性と、目と目が合った。どういう訳か、その女性がニコッと微笑んだ。〈誰

に微笑んだのかなあー〉と、辺りを見回したが他には誰もいなかった。久しぶりに見る清々しい笑顔。どちらからともなく並んで歩き出した。

彼女はアメリカ人だった。イリノイ州立大学で、ドイツ語を専攻し、ウィーンの某高校に、短期教師として教えに来ていたと言う。帰国する前の小旅行中だった。後で知り合ったドイツの青年男子と三人で、ユース・ホステルに泊りながら、二日ほどプラハの街を見物して廻った。食事の時や、ユースホステルでの就寝前に、よく三人で話をした。とは言っても、私はもっぱら聞いている方が多かったが、不思議に三人とも気が合い、一緒に居ることが楽しかった。時間は「あっ」という間に過ぎた。

次の日、彼女は、フィンランドの友達を訪ねると言って、朝早く駅に向かった。彼女が去った後、突然「何か、大切なものを失ってしまう」と言う衝撃が走った。急いで後を追ったが、列車はすでに出発した後だった。

二度目のひらめき

そのすぐ後に、またまた突然インスピレーションがひらめいた。

「そうだ、アメリカへ行ってみよう。彼女の育った町を訪ねてみよう」と。幸い住所を交換し合っていた。

それまでは、アメリカに対して、ベトナム戦争に絡んで反感を抱くことはあっても、好意は持てなくなってしまっていた。その為「決してアメリカへは行くまい」と、堅く決意していた。しかし、彼女と出会った事によって、その堅い決意がいっぺんに覆ってしまった。〈人間の決意なんぞ、案外といい加減なもんだ〉と内心自嘲したものの、アメリカへ行って、彼女に逢おう、と言う新たな決意が堅くなった。

ユダヤ人の宗教哲学者、マルティン・ブーバーいわく、「人生は出会いで決まる」と。まさに彼女との出会いは、やがて私がクリスチャンとなり、更に牧師となる為の、決定的出会いの一つとなった。事実この一年数ヶ月後、サンフランシスコいる時に教会に導かれ、やがてイエスを救い主として信じるようになるのだから。後に、人と人との出会いの中にも、神の深い導きがあることを、家内との結婚を通しても、更によく知るようになった。・・・

再びストックホルムを目指して

それからは俄然、生き生きやる気が出てきた。それまではすでにヨーロッパ、アフリカ、中近東と一年も放浪し、少々、そういう生活にも疲れを感じていた。しかし、いまだ生き甲斐となるものも見出せず、半分惰性、半分やけくそになっていた。ところが、その出会いの後、大きな希望が湧いてきた。

まずカネを貯めようと、勝手知ったるストックホルムに行くことにした。今度は希望に燃えた北帰行だった。「胸は希望に燃えて、今日も行く行く北国めざして・・・」と、変な替え歌を唄いながら、旧チェコスロヴァキアからドイツ、デンマーク、そしてスウェーデンへと、野宿とヒッチハイクを重ね、ひたすらストックホルムを目指した。時には雨に降られ野宿もままならず、カッパを着て夜通し歩き続けたこともあった。しかし希望が有ると云うことは、何と大きなエネルギーを生むことだろうか。雨に煙る暗い道すらも、鼻歌混じりで足が弾んだ。

一年ぶりのストックホルム

ストックホルムについた翌日から、早速仕事を探し始めた。今回も例のごとく、仲々見つからなかった。しかし、半ばあきらめかけた頃、市民病院での皿洗いの仕事が見つかった。この際カネさえ貯まれば、仕事の内容はどうでも良い。もっともスウェーデン語が出来ない以上、多くは望み得べきもなかったが・・。

仕事の合間には、せっせと図書館に通った。〈英語も一朝一夕には身につかないものだ〉と、ただひたすら彼女と逢える日を夢見て悪戦苦闘。滞在期限は「あっ」という間に過ぎて行った。

〈どうせ英語をやるなら、イギリスへ行ってみよう〉と思い立ち、またまた準備も計画も無く飛び出して行った。北欧の十一月は、ヒッチハイクをするには寒すぎる。奮発して列車とフェリーを乗り継いだ。

ロンドンでも皿洗い

ドーバー海峡の風は冷たかった。一羽のカモメの姿も見当たらないほどだ。さすがに、今頃になって〈これからどうなるのだろう〉と、少々不安になって来た。

「ええ～い 出たとこ勝負だ。男一匹なんとかならぁ～な」。

ロンドンには着いたものの、これまた右も左も分からない。行き当たりばったりに安いホテルへ飛び込み、休む間もなく仕事を探し始めた。

〈皿洗い以外の仕事が見つからないかなあ～〉と思いながら歩き回った。

すぐに見つかった。が、やっぱり皿洗いの仕事だった。男一生の仕事にする訳ではないし、まっ、いいか、と割り切る。

仕事の合間に、良い語学教室がないものかと探し回ったが、安くて評判の良い所はなかなか見つからなかった。

一ヶ月も過ぎた頃、急にロンドンにいることが馬鹿らしくなってきた。

〈こんな所で、皿洗いの仕事を続けているぐらいなら、いっそ予定を早めてアメリカへ行っ

てしまおう〉と思い立った。
思い立ったが吉日。早速アメリカ大使館へビザを貰いに行った。
この時期、ロンドンでアメリカのビザを取ることは非常に難しいと言われていた。特に、私のようなヒッピーくずれには容易ではないと言う噂が流れていた。そこで、伸ばし放題であったヒゲを、十ヶ月ぶりに剃り、仕事仲間達から背広、Yシャツ、ネクタイ、靴、その上三千ドルほど「見せ金」の為に拝借し、大使館へ向かった。
その時、何に祈ったのか定かではないが、必死に祈った。
「神さま、絶対、何がなんでも、どんなことがあってもアメリカへ行けるようにして下さい。ビザが貰えるように助けて下さい。何でもします」と。まったく虫の良い祈りだった。しかし、その時は本気だった。万が一にもビザが貰えなかったら、それこそ夢も希望も失ってしまう様な気がした。

内心ハラハラドキドキだったが、平静を装って言った。
「私はアメリカが大好きで、アメリカの歴史に大変興味を持っている。是非、この目で幾つかの歴史的場所を見てみたいし、アメリカの友人をも訪ねてみたい。ま、二、三ヵ月もあれば十分だと思う。その後は日本へ戻って、また大学で学びを続ける予定だ」と一夜漬で覚え

てきた英語で、ウソと真実を混ぜながらまくしたてた。大使館員は、私の真剣さに圧倒されたのか、それとも〈どうでもいいや〉と思ったのか分からなかったが、「ＯＫ」とささやいた。ビザはすんなり貰えた。しかも、あろうことか、四年間のビザである。あの時の「ＯＫ」は、何と言う心地よい響きだった事だろう。それと同時に、〈アメリカで何かが見つかるのでは〉と言う、不思議な期待が起こってきた。

――こうして神はすべての状況を用い、私を一歩一歩アメリカへ、そして「救い」へと引き寄せて下さった。――

いざ行かん、アメリカへ！（六年間に及ぶアメリカ暮らしの始まり）

数日後、ニューヨークへ飛んだ。ケネディー空港に降り立つと、ロンドンとは違った活気を感じた。ロンドンで得た情報をもとに、マンハッタンのタイムズ・スクウェアーのすぐ近くにあるバンコートランドと言うホテルの一室を訪ねた。そこには私と同じ類（たぐい）の連中がたむろしていた。

「こんな連中と一緒では英会話は身につかないな」と内心思ったが、部屋代が格安であった為、「一宿一飯の恩義に与かります」と挨拶した。

「まっ、困ったときはお互い様だ。いつまでも好きなだけ居な。仕事の方もすぐ見つかると思うよ」と、まるでどこかの世界のような挨拶を交わし、暫らく同居する事にした。確かに仕事もすぐに見つかった。日本人のレストランで、キッチンヘルパー兼皿洗いとして雇ってもらった。

――それにしても、日本を飛び出してから、一体何万枚皿を洗ったことだろう。――

職場の人間関係は最悪だった。

「この野郎、ぶっ殺してやる」とコックが、包丁片手にオーナーを追い掛け回すハプニングまであった。「こんなところに長居は無用」と二ヶ月で辞めた。

次に、豆腐作りの仕事を見つけた。まさかニューヨークまで来て、豆腐作りをするようになるとは、夢にも思わなかった。〈まっ、いいさ。何でも経験。きっとこれも役立つ時が来るかも知れんし・・〉とやることに決めた。朝から晩まで大豆を煮、お湯をかき混ぜ、にがりを入れ、布袋を洗うと言う日々が続いた。一日中、中腰の姿勢は堪(こた)えた。皿洗いの比ではなかった。それ以来、腰痛は持病となってしまった。仕事は超きつかったが、人間関係だけ

は良かった。
しかし〈いつまで豆腐作りをやっていても、らちがあかないナー。何とか英会話を身につける方法はないか〉と思い巡らし、一つのアイデアが浮かんだ。それは、ハウスボーイとして、アメリカ人の家に住み込む事だった。早速、「ニューヨークタイムズ」に「ハウスボーイの職を求む」と言う広告を載せる事にした。

数日後、一つの反応があった。「雇おうと思うから、まずインタビューに来い」と言う。行ってみてビックリ。その屋敷のデッカイこと。中に入って、またまたビックリ。玄関を入ると家族用のプールがあった。屋外にプールがあるのは、さほど珍しくないが、まさか家の中に有るなんて・・。この家の主人は、某地方銀行の副頭取とのこと。道理で金持ちのはずだ。が、残念ながら、この話はまとまらなかった。しかし、この時、〈俺も、絶対金持ちになる。人生の目的は金持ちになる事だ〉と血迷った考えを持った。

更に数日して、もう一件の電話が有った。話がまとまり、住み込む事になった。セントラルパークを眼下に見下ろす高級マンションであった。四才の男の子と、八ヶ月の男の赤ん坊の世話をしてくれとのこと。いわゆる、ベビースィッターだ。願ったり叶ったり。ニンマリ

笑みがこぼれそうになるのをグっとこらえた。
所が、これがとんだヌカ喜び。四才の男の子は反抗期の真っ只中。ちっとも言う事なんぞ聞きやしない。余り言葉が通じなかった事もあるとは思うが、とにかくホトホト手を焼いた。時たま頭に来て、「柔道を教えてやる。かかってこい」と、ぶん投げてはストレスを解消した。が、不思議なことに、その子は柔道ごっこが一番好きになってしまった。
八ヶ月の子も、これまた手がかかった。ちょっと目を離すと、何でも口に入れ「ゲエーゲエー」やりだす始末。その上、おっきなウンチはするし。おむつを替える度に、ウンチが、その子の背中一杯にくっついてしまい、その汚さと臭さに気持ちが悪くなり、毎回吐きそうになった。その子達の母親に向って〈少しは自分でも面倒みろよ。自分で生んだんだろ。ったく・・〉と口まで出かかったが、グッとこらえて、しばらく頑張った。が、〈これじゃ、英語が身につく前に、ノイローゼになっちまう〉と一ヶ月で退散。それでも辞めるときには、“Susumu Don't go. Don't go. Come back Susumu”と、四才の子に泣かれ、後ろ髪が引かれる思いだった。と同時に、映画「シェーン」の主人公になったような気分だった。
そんなこんなで八ヶ月もニューヨークに滞在したが、ちっとも英会話は身につかなかった。〈こんな事やっていたら爺になっちまう。仕方がない。全然英語は上達してないけど、彼女に逢いに行くか〉と、ニューヨークにおさらばをする事にした。

イリノイ州の片田舎を目指して

アメリカでのヒッチハイクは危険だ。今までに何人も殺されている」と聞かされていたので、最初は不安だった。しかし、例の「まっ、何とかなら〜ナ」で、街の郊外からヒッチハイクを開始した。

途中、ナイアガラの滝を見物し、あとはわき目も振らず、一路彼女の住む町を目指した。事前に電話で「約束通り訪ねて行く。ただ、ヒッチハイクで行くから、いつ着くかは、車次第だ」と知らせておいた。

「両親も楽しみに待っている」との事。

たかだか一八〇〇キロメートル。何のその、と思ってはみたものの、仲々辿り着かなかった。どういう訳か、思った以上に乗せてくれないのだ。やっぱり、みんな〈変なの乗せると危ない〉と思っていたのかも知れない。つくづく〈ヨーロッパ人の方が親切だったな〜〉と思った。

感激の再会

悪戦苦闘しながら、四日もかかってようやく辿り着いた。一年ぶりの再会だった。彼女が例の清々しい笑顔で出迎えてくれた。両親と二人の妹達も待っていてくれたのには驚いた。特に父親は「こんな遠い所まで、よく会いに来てくれた」と両手を広げて抱きしめてくれた。みんな感じの良い人達だった。

イヤアー、来た甲斐があった、と大感激。夕食は分厚いステーキだった。

食事をしながら、色々尋ねられた。

「どうして、そんなに長く放浪しているんだ？」。

「日本へ帰っても、何をしたら言いのか分からないんです」。

「・・・・・」

「両親は何をしているんだ？」。

「百姓です」

「旅費はどうやって稼ぐんだ？」。

「カネが無くなったら、皿洗いでもなんでもやります」。

「これからどうするんだ?」。
「ハ〜ア まだ良く分かりません。・・・多分、しばらくアメリカに滞在するようになるかもしれません」。
「まっ、若いうちは、何でもトライしたらいいさ。悔いの無い人生を送るよう、頑張りなさい」と親身にアドバイスしてくれた。
しかし、一つ一つの質問に、ジェスチャーを交えながら答えるのに、汗だくになってしまった。せっかくの、油したたる分厚いステーキも、味の抜けたチューインガムを噛んでいる様に感じられた。〈やっぱり、もっと真剣に、英語をやっておくんだった〉としきりに後悔したが、後の祭り。

その晩は、疲れているはずなのに、頭の中を色んな思いが駆け巡り、興奮して一睡も出来なかった。〈逢いには来たものの、これからどうしよう。こんな小さな町では、仕事もなさそうだし。かと言って、このまま日本へ戻っても元の木阿弥だし。一体どうすりゃいいんだ〉と、悶々としているうちに白々と夜が明けてしまった。
「何日でも泊っていけ」と、言ってくれたが、そんなに甘える訳にも行かず、二晩ほどでお別れする事にした。

島崎藤村の「惜別」の詩を胸に思い浮かべながら・・・。

君がさやけき目の色も
君 紅(くれない) の唇も
君が みどりの黒髪も
またいつか見ん この別れ

別れと言えば昔より
この人の世の常なるを
流るる水を眺むれば
夢恥ずかしき涙かな

一路 カナダのバンクーバーを目指す

〈折角ここまで来たのだから、いっそ　西海岸まで行ってみよう。何かが見つかるかもしれない〉と言う思いが湧いてきた。

――こうして、更に一歩、神の恵みに近づけられて行った――

ロンドンに居るときに出会った一人のカナダ人を思い出した。親切にも、「もし、カナダに来る事があったら、是非訪ねて来てくれ。バンクーバーは本当に奇麗な街だ。・・仕事も紹介するから」と言ってくれていた。幸い住所を失くさずに持っていたので、一路、彼の住むカナダのバンクーバーを目指す事にした。しかし、直線でも優に四千キロメートル近くあり、実際の道のりは五千キロメートル以上だろう。それがどれほど遠いのか、ピンと来なかった。

（ちなみに、北海道の稚内から鹿児島の最南端まで、約2千キロメートル）。

旅費を節約する為にヒッチハイクで行く事にし、彼女の父親に、車の捕まりそうな所まで連れて行ってもらった。

三度目の命拾い

アイオワ州に入った頃、ヒッチハイクの合図を送っていると、真新しい高級車、リンカーンが止まってくれた。

〈まさかこんな良い車が止まってくれるなんて・・？〉と戸惑っていると、「乗れ」と言う。見ると、まだ二十歳（はたち）前の若い男だった。

〈ヤッター！　ラッキー〉と思いつつ乗り込んだ。彼は社交的で陽気な、典型的なヤンキー青年だった。ジェスチャーを交えながら話が弾み、地図を広げて、これから向かう町を指し示していた。

すると突然、車が右に左に蛇行し始めた。

「オイ、冗談はよせよ。危ないじゃないか」と彼の顔を見ると、真剣そのものだった。

「ヤッ、ヤバイ。ブレーキ、ブレーキ」と叫んだが、時速一〇〇キロメートルも出ている車は、そう簡単に止まらなかった。彼の「アアーアー」と言う、ターザンの雄叫びを思わせる声とともに、車は道を外れ、道路の側（わき）を流れる川の中に突っ込んでしまった。

幸いにも川は干上がっており、一滴の水も流れてはいなかった。しかし車体は一八〇度回転し、気がつくとまっ逆さまに座っていた。車輪は空中で猛スピードで空回りし、ドアは完全

につぶれ、フロントガラスも大きくひび割れが出来ていた。後続車の人達が次々と集まり、車を取り囲んで中を覗いている。死んだか、血を流して唸っていると思ったらしい。一人の老人が「たばこは吸っていないか？」と叫んだ。ガソリンが漏れていると言う。幸い、二人ともたばこは吸っていなかった。ドアは蹴っても押しても、びくともしなかった。「レスキュー隊を呼んだから、じっとしていろ」と言う。まっ逆さまのまま、待つこと一〇分。時間が止まったかのように感じられた。

レスキュー隊によって助けられたとき、不思議なことに、二人ともかすり傷一つ無かった。ただ、高級車リンカーンは見るも無残に、まるでガマガエルを潰したようになっていた。乗せて貰う前に思った、〈ヤッター！　ラッキー〉は〈アンラッキー！　やめときゃ良かった〉に変わってしまった。しかし、かすり傷一つ負わなかったことは、確かに、何よりラッキーであったことに違いない。

――後に、この時も、全能の神の奇(くす)しい守りがあったことを思い知らされた。が、この時はただ「俺は、死ぬ時が来るまでは絶対死なない」と言う、何とも論理性のない意味不明の確信を持っただけだった。――

コロラド州からは、ロッキー山脈を左手に眺めつつ、カナダを目指して一気に北上した。この時もしきりに「北帰行」の歌が心に響いた。

牧場か、農場なのか、はた又、ただの原野なのか定かではない中を、道路は果てしなく真っ直ぐ北に延びていた。その道路は、終(つい)には点となってしまい、ようやく、その点まで辿り着いたかと思うと、更に延々と一直線に延び、また点になってしまう。まったく、その土地の広大さに、ただただ呆れ返り疲れを覚えた。

〈こんな馬鹿デッカイ国と喧嘩しても、勝てっこないよな〜〉と、つくづく実感した。

バンクーバーには着いたものの

青息吐息で、ようやくカナダのバンクーバーに辿り着いた。イリノイ州の彼女の家を出発して、実に一一日もかかってしまった。旅費を節約しようとしてヒッチハイクを試みたが、結局日数がかかった分、食費やホテル代がかさみ、余りカネの節約にはならなかった。

早速、例の友人に電話をかけた。

「今、バンクーバーに着いたんだけど・・」。

「おっ　お前、本当に来たのかよ」。
〈それはないだろう・・〉、と思ったが
「アーァ、ニューヨークからヒッチハイクでやって来たよ」。
「そっ、そうか　本当に来たか・・」。
「・・・・・・」
「・・出来ればこの街で、働きながら英語を勉強したいんだけど…・・・適当な仕事ないかな？・・」。
「…ウーン…・今のところ・・無いナー・・」
「お前、約束したじゃないか、仕事の世話をするって、ロンドンに居る時・・。無責任なこと言うなよ」。
「…ゴメーン…・」…。
「何だよ、社交辞令かよ　あの言葉は・・ったく頭に来る」。
最初から最後まで、お世辞にも、喜んでくれているとは思えない声色だった。
・・・・・・・・・・・・
「しょうがない。アメリカへ戻るか」、と早々に立ち去ることにした。
確かにバンクーバーは奇麗な街であったが、裏切られた失望の方が大きかった。

サンフランシスコを目指して

また、えっちらおっちら、野宿とヒッチハイクを続け、今度はサンフランシスコへと向かった。途中、アメリカの国境に近付いたところで車を降ろされ、歩いて出入国管理ボックスを通過しようとした。

「いやな予感がするナー」と思ったら、その感が当たってしまった。

入国させないと言う。

「何故だ」と問うても「ＮＯ、ＮＯ」とウサン臭そうに言い放つだけで、らちがあかなかった。仕方なしに、とぼとぼ歩いて引き返し、数一〇キロメートル離れた別の所を通ることにした。今度は用心の為、アメリカに向かうバスに乗ることにした。

国境で、アメリカの係官に「パスポートを見せなさい」と言われた時は、一瞬ヒヤッとした。が、問題なく通過することが出来た。野宿も、虫に刺され蚊に刺され、散々な目にあった。それ以来、一度もカナダへ行こうとは思わなかった。

――しかし、このサン・フランシスコ行きが、私の人生に大きな転機をもたらすとは想像もしなかった。――

第三部　人生の転機

五年間のサンフランシスコの生活スタート

足を引き摺るような思いで、ようやくサンフランシスコに着いた。さすがに、ニューヨークからカナダのバンクーバーを経由しての、延べ七千キロメートル近くのヒッチハイクは体に堪えた。しばらくは何もしないで、ただ体を休めたかった。しかし、所持金は心細くなってきた。もっとも、日本を飛び出してから、カネにゆとりがあったことは一度もなかったが・・。一泊三ドル五〇セントの、一番安いホテルに泊りながら、早速仕事を探すことにした。〈英語を学ぶには、アメリカ人と一緒に暮らすのが一番〉と思い、ハウスボーイの仕事をすることにした。ニューヨークに居る時にやった様に、新聞に広告を載せ、ホテルの部屋でひたすら電話のかかってくるのを待った。

一日々々が無性に長く感じられ、部屋の饐（す）えたような臭いだけがやけに鼻についた。テレビもラジオも無く、ただベッドに寝そべり、ボンヤリ天井を見つめながら、あてのない電話を待ち続けた。今まで味わったことのないような、大きな焦燥感と孤独感に襲われた。待てど暮らせど電話は鳴らなかった。

いよいよ今日で、広告掲載一週間の期限が切れると言う時に、一件の電話が鳴った。「会っ

て話をしたいから来い」と言う。とにかくどんな条件でも飲んで、たとい一週間でも雇ってもらう覚悟で出かけた。それは街の郊外、ツイン・ピークと言う観光の名所にもなっている所にあった。

サンフランシスコ湾を一望し、遥か右手にベイ・ブリッジ、斜め下にゴールデンゲート・ブリッジを眺望すると言う絶景の地であった。仕事の内容は、二匹の犬の世話と家の清掃、料理の手伝いと言うことだった。いちもにもなくＯＫした。まったく、三文小説の作り話のような、危機一髪の展開だった。

サンフランシスコでの最初のハウスボーイ

住まいも食事も、当面心配は無くなった。給料はないが、スズメの涙ほどの小遣いを貰えることになった。もっとも、スズメの涙でももう少し多いのではないかとは思ったが…。

「ままにならぬはこの世の常」、とはよく言われることだが、確かにその通りだった。ハウスボーイとして住み込み、これで、そこの家族と英語で話すチャンスがいっぱい出来ると期待したが、完全に期待外れであった。彼らにとっては、私は単なる雇い人に過ぎず、好き好

んで私の相手などする必要などない訳である。用が済めば、さっさと自分の部屋に入ってしまい、なかなか英語を話すチャンスはなかった。仕方がないので、英会話を学べるところを捜した。所が不思議なことは続くものだ。あっさりと見つかった。しかも授業料はタダ。

その学校は、主にアメリカへ移住した人達や、何らかの理由で、正規の学校に行けなかった人達の為のものだった。英語や簡単なアメリカの歴史を教え、更に、職業訓練所も兼ねているようだった。しかし、通うようになって驚いた。日本人が腐るほどいた。中には、半分腐りかけていると思える者も見受けられた。

日本食に誘われて

ある日、一人の日本人の女の子が声をかけてきた。「今度、『キー73』と言うキリスト教の集会があるんだけど、来ない？」と言う。彼女はどうもクリスチャンらしかった。その言葉だけだったら誘いに乗らなかったが、「日本食も出るわよ」の言葉が効いた。

日本を飛び出して、既に二年以上が過ぎていた。それ以来、まともな日本食を食べていなかった。そんな私に、「日本食も出るわよ」は大きな魅力だった。もっともカネさえ出せば、

その当時でも、日本食レストランはどこにでもあり、食べることが出来たはずだが、なにせ倹約尽くめの私には、そのゆとりが無かった。

また、日本食の魅力に誘われたのと同時に、牧師とやらを「ギャフン」と言わせてやろうと言う魂胆もあった。と言うのは、私には、キリスト教に対して反感にも似た大きな疑問があった。それは主に、ヨーロッパを放浪している時に感じたものだった。オーストリアはウィーンの大聖堂、ドイツはケルンの大聖堂 等々を見るたびに思った。〈これらを建てあげる為に、一体どれほどの平民が無理を強いられたことだろう。また、神の名の故に戦われた十字軍戦争で、どれほどの尊い血が流されたことだろう。宗教は、無知な人々をだまし、自分の欲望を満足させる、時の権力者達の巧妙な手段だ〉と。

その集会は、サンフランシスコの日本人町の或るホールで開かれた。大勢の人々が集っていた。白人の姿もちらほら見られたが、ほとんどが日系人だった。メインスピーカーは、日本からわざわざ来られた、羽鳥純二牧師だった。勿論、話は日本語だった。しかし、ちんぷんかんぷんでちっとも分からなかった。話が支離滅裂とか、難しいとかではない。むしろ雄弁で、話の起承転結もしっかりしており、平易な語り口であった。しかし、それでも分からなかった。私にとって、聖書の話を聞くのは、これが生まれて初めての経験であった。それゆえ「あなたは神に愛されています」と言われても、一体どの神さまなのか、神が私を愛し

ているとはどう言うことか、まるで異次元の世界の話を聞かされているように思えた。
ただ、「人は難行苦行をすることによっては救われません。良い行いをすることによっても救われません」と言う言葉にはカチンときた。その当時、私は「人は良い行いをすることによって救われ、難行苦行することによって魂が清められる」と考えていたからである。
もう一つ、心に残った言葉があった。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも、あなたの家族も救われます」(使徒一六・三一)。それが聖書の言葉であることは後に知った。
話は分からないまま終わったが、〈ここには何かがある〉と直感した。三度目のひらめきである。
――私の過去を振り返ってみると、転機となるような出来事のときに働く「直感」が、私の人生に、大きな影響を与えていることが分かった。この直感さえも神の与えて下さった導きであったのか?――

俺が教会へ？？

サンフランシスコに来て、三軒目のハウスボーイをしていている時の事。その頃、不思議に道が開かれ、某カレッジにも通うようになっていた。その授業料を稼ぐため、学校の帰りに二・三軒、ハウスクリーニングの仕事をやり、家に帰ると更にハウスボーイとしての仕事が待っていた。こうして働いても、毎月の授業料を稼ぐのは容易ではない。カネの無いのには慣れっこになってはいたが、親からの仕送りで優雅な留学生活を送っている友人の姿を見ると、ちょっぴり妬ましい思いを抱くこともあった。

その様な状況の中にあった私にとって、その家の主（あるじ）たちの暮らしぶりは羨ましい限りであった。そこの主人は、アメリカでも何本かの指に数えられるやり手の弁護士とか。その住居は、ゴールデンゲート・ブリッジのすぐ近くの高級住宅街にあり、家の中にはエレベーターすらも備えられていた。三階からはサン・フランシスコ湾が一望出来る、夢のような超贅沢な暮らしぶり。勿論、週末は別荘暮らしである。私のほかにもう一人、炊事洗濯の為に、メキシコの女性が雇われていた。故に、そこの奥さんは何一つする必要もなく、全く悠々自適な日々を送っていたのである。傍から見ても、これ以上の幸せはないであろうと映った。

所が、不可解なこともあるものだ。彼女は朝から晩までワインを片手に、ブツブツグチグチ、不平タラタラ。ブタですらあんなにブウブウは言うまいと思うくらい、ブウたれていた。〈どうして、そんなに文句ばっかりなの？？〉と、不思議で仕方がなかった。はた又、私の中に高尚、且つ哲学的な疑問が起こってきた。「果たして、人間の幸せって何なの？？？」。

その様な問いを持ちながら日々を送っていた、ある土曜日の午後、友人に誘われて、生まれて初めて教会を訪ねた。それは、サンフランシスコから東へ七〇～八〇㎞にある、「サンロレンゾホーリネス教会」と言う日系人の教会であった。

教会の中に入ってみると、八十才近い二人の婦人が、ニコニコしながら讃美歌を口ずさみつつ、広い会堂に掃除機をかけているところだった。その姿は非常に感動的であり、衝撃的ですらあった。例の不平タラタラの女主人との余りの違いに、「一体、どこに原因があるのだろう？」と考えさせられた。それから、不思議にも、毎週日曜日ごとに、遠路はるばる、その教会に通うようになった。

それまでは、キリスト教会と自分とは一生無関係だと思っていたし、私の友人知人の誰に聞いても、「お前と教会はおおよそ似合わない」と口を揃えて言う。

「お前が聖書を読む姿なんぞ、ゴリラが紋付き袴で、傘さして歩くより滑稽な気がする」と、訳の分からない変なたとえを言う者もいた。が、確かにその通りだ。自分でさえも〈俺が教

会へ行くなどと言うことは、たとえ太陽が西から昇ることがあり、サハラ砂漠に雪が降ることがあっても、あり得ない〉と思っていた。故に、その教会が私の母教会となるとは、その時夢にも思わなかった。

毎週末、恩師の中野雄一郎牧師の家庭や、帰米二世の田辺さんと言う家庭にお世話になり、日本食を食べ漁った。いつ訪ねても、イヤな顔一つせず、快く迎えて下さったことには、ただただ頭が下がる思いだった。

ちなみに、その頃の私の日曜日のスケジュールは、まず礼拝に出席し、それが終わると待ちかねていたように、一世の婦人達の手作り日本食を三人前たいらげ、腹が満ちると、同類の貧乏留学生達と遊びほうける。更に夕食は、中野牧師宅と田辺御夫妻の家庭へと二手に分かれ（時には別な家庭で）、これ又、たらふく日本食を食べあさる。その上、日本語のテレビ番組を夜の九時まで観て、最後は車でサンフランシスコまで送ってもらう、と言うのがお決まりのコースだった。超甘えぱっなしの教会生活である。今思うと、もう少し遠慮したら良かったと思うが、その時は、それが数少ない楽しみの一つであった。

それだけ温かいもてなしを受けていたら、さぞかし礼拝ぐらいは熱心に守っていたかと言うと、残念ながらそうではなかった。礼拝が始まり、讃美歌を二、三曲歌い、メッセージが

始まると間もなく、決まってウトウト眠くなって来る。〈今日こそ絶対寝ないぞ～～〉と、必死に思えば思うほど睡魔に引き込まれた。時には居眠りの範疇を超えて熟睡してしまい、気がつくと三〇分近く経過していることもあり、全く何しに礼拝に行っているのか、自分でも疑問に思うこともあった。そんな私であったが、教会の人々は温かく迎えてくれ、私の救いの為に祈り続けてくれた。

その頃の私は、神の愛をハートではなく、腹で味わっていたようだ。

――確かに、心のこもった日本食がなかったら、今の私はなかったと思うこの頃である。――

「俺、洗礼を受けちゃった」

その様な教会生活を続けているうちに、一年が過ぎようとしていた。

ある日、中野牧師が「進兄弟（クリスチャン同士ではこのように呼び合うこともある）、そろそろ洗礼を受ける気はないか」と尋ねてきた。実の所、そんなに真剣に信仰に取り組んでいた訳ではなく、クリスチャンになろうとも思ってはいなかった。しかし、如何せん、断るには余りにも日本食を食べ過ぎていた。それでも躊躇していると、たたみ掛けるように「もし、

イエス様を信じて、裏切られたと思ったら、その時はやめても良いじゃないか」と助け船（？）を出してくれた。その一言で、〈そうだな、聖書の教えが間違っているとは思えないし、長い間求めていた人生の目的、生き甲斐も、イエス様を信じることによって見出せそうだし、万一だめでも、その時はその時だ〉と言う思いが、瞬間的に頭の中を駆け巡った。

一見不謹慎に思えるが、そこにも「何としても、この男も救おう」と言う神の憐みと、中野牧師の情熱があったことを後に知った。そう言ういきさつから、形ばかりの悔い改めをして、とうとう洗礼を受けることになった。

――このかたちばかりの悔い改めが、後で私を悩ますことになるのだが。――

一九七四年一二月十五日、ついにその日が来た。いつもの通り礼拝が終了すると、洗礼着に着替え、洗礼槽に入り跪（ひざまず）いた。すると中野牧師が私の頭に手を置き、「永山進、我、父と子と聖霊の御名によって、汝に洗礼を授ける」と大きな声で言うが早いか、私を水の中に沈めた。「アッ」と言う間の出来事だった。水から上がると、皆が口を揃えて「進兄弟 おめでとう」、「おめでとう」と言ってくれた。私は内心〈何がおめでたいのだろう〉、と思っていたが、「皆がおめでとう、おめでとう、と言うのだから、おめでたいのだろう」と、逆らわず

に「有り難うございます」と形を繕った。こうして、私も一応クリスチャンの仲間入りをした。

洗礼を受けたら、早速、「若木会」という青年会の会長に押されてしまった。歳が一番上だからと言う単純な理由からだった。とにかく、形だけはクリスチャンであり、青年会の会長でもあった訳だが、明確な救いの体験はなかった。それでも、いっぱしに分かった風なことを語り始めた。まさに「門前の小僧習わぬ経を読む」である。確かに、一年以上も教会に通っていると、大体の聖書の知識は身につくものである。

「あんたね、聖書の教える神は天地万物を創造され、人間をも創造されたお方なの。人間が作った神は、偶像と言って本当の神じゃないんだよ。分かる？」。「その神さまはネ、義なるお方で、不正や罪を憎むんだって。でも、神さまは私達を愛して下さって、救い主をこの世に送って下さったの。その救い主がイエス様なんだよ」。

「イエス様が十字架につけられたのは、あんたや俺の罪を赦す為だったんだ」。

「あんたもいっぱい罪を犯して来ただろう。例えばさ、うそをついたとか、人を憎んだとか、好色、妬み、姦淫、そう言うのも全部罪なんだよ。あんた少しは罪の意識あるの？」。

「でも、誰でもイエスさまを信じるだけで罪が赦され、救われるんだ。それが聖書の約束なの。あんたも信じたら良いよ」と先輩ぶって、新しく教会に来た若者達に話をしていた。

しかし、信仰に限っては、頭で知っていると言う事と、本当に神の救いの恵みを体験し、その恵みに生かされていると言う事とは、天地ほど違うものである。その頃の私の信仰は、明確な救いの喜びがなく、非常に不安定であった。その様な状態のまま、三年近くが過ぎ去った。

その頃、私は某カレッジを何となく卒業し、某州立大学に何となく通っていた。それは、文字どおり「通っていた」と言うだけで、授業中は、心ここに在らずであった。日本に戻る理由が見つからないから、アメリカに居座っている。その居座る手段として大学に通っていると言うだけであったから、ただ落第しない程度の勉強しかする気がしなかった。

苦悩の日々

勉強もさっぱり、信仰もさっぱりの状態のまま、悶々と日々を過ごしていた。大学へ行く途中に、長さ三百メートルくらいのトンネルがある。ある日、電車に乗って、そのトンネルの中を通っている時に思った。〈俺の人生 いつまでトンネルが続くのだろう。出口はあるのだろうか？〉と。歳も三十に手が届くまでになっていた。将来への確かな見通しも立たず、益々焦

りが強くなり、不安が増した。
その様な状況の中で、ただ一つ夢中になっていたものがテニスだった。
誰かに、「三度の飯より好きなものは何だ」と尋ねられると、「はい、四度の飯とテニスです」と、まじめに答えるほど虜（とりこ）になった。ただ残念ながら、最初だけ少しコーチしてもらったが、あとはほとんど見様見真似の自己流だった。（今でも変態テニスと言われるのは、その辺に理由が有りそうだ）。休みの日には、朝から晩まで、テニスコートにたむろしていた。
しかし、いくらテニスが好きだからと言っても、このままかけがえのない一生を終えたいとは思わなかった。

不思議な体験

とうとうある日、神に真剣に訴えた。
「このような中途半端な人生は真っ平です。たとい短い生涯でも結構ですから、充実した人生を送れるようにして下さい。さもなくば命を取って下さっても結構です。形だけの信仰ではなく、喜びのある本物の信仰を与えて下さい。その為にはどんなことでも従います」と。

クリスチャンになって、初めて心の底から真剣に祈った。祈ったと言うより、神と格闘したと言う感じだった。その様な真剣な祈りと格闘が、一週間ほど続いた。

ある晩、祈りながら聖書を読んでいると、今まで体験したことがない不思議な言葉が心に響いてきた。

「悔い改めなさい。心から悔い改めなさい。自分の過去の罪を洗いざらい、神に告白しなさい」。

……

冷や汗が出た。・・・一体これは何だろう?幻聴か気の迷いか・・・

しばらくすると、また同じことばが響いてきた。「悔い改めなさい。心から悔い改めなさい。自分の罪を洗いざらい、神に告白しなさい」。

更に、「神に従いなさい」と言うことばが続いた。(ちなみに、「悔い改め」とはギリシャ語で、「メタノイア」と言い、方向転換、心の入れかえ、改心などを意味する)。

確かに「どんなことでも従います」と祈っていたが、まさか本当に、そんなことを要求されるとは思ってもいなかった。何日も拒み続けた。

「そんなこと出来ません。罪を洗いざらい告白するなんて、恥ずかしいじゃないですか。メンツ丸つぶれですよ。それだけは勘弁して下さい」と、それほどの状況に追い込まれても、

まだ自分のプライドやメンツにこだわっていた。元々たいして失うものがある訳ではないのだが、それでも頑として拒み続けた。しかし、拒み続けるのにも疲れ切ってしまい、とうとう観念した。

「分かりました。あなたのおっしゃる通りにします。全部告白します」と、ギブアップした。示されるまま、小さい子供の時から現在に至るまでの犯した罪を、一つ一つ導かれるまま告白していった。出て来るわ出て来るわ、よくもこんなに悪いことをして来たものだ。よくも平気で生きて来られたもんだと、我ながら驚きあきれた。親のカネや他人の畑のスイカを盗んだこと、カネのために友人を利用し、裏切ったこと、ヨーロッパ、アフリカ、中近東、アメリカ等々、それぞれの地での悪い行いの数々。よくあることと言えばそれまでだが、仮にもクリスチャンとして歩み始まった私にとって、それらは神の前における大きな罪として迫ってきた。思い出す全ての罪を神の御前に告白し、黙想していると、またまた大変な言葉が響いてきた。

「あなたは、私に告白したことを人々の前にも告白しなければならない」と。これには心底参った。

「神さま、それだけは絶対に出来ません。勘弁して下さい。そんなんだったら死んだ方がましです。あなたに告白したんだから、それでいいじゃないですか。もうこれ以上絶対、絶対

イヤです」。何日も何日も必死に拒み続け、無視し続けた。しかし、神は私に対して、その事について、決して妥協されようとはなさらなかった。更に苦悩が深まった。大好きなテニスをしている時でも、心は晴れなかった。葛藤の日々が一ヶ月ほど続いた。ある日、とうとう逃れられない状況に追い込まれ、またまた観念した。

「もう、ほとほと疲れました。あなたのおっしゃる通りにします。今度の青年会の時に告白します。どうぞ責任取って下さい。私の将来がどうなるのか分かりませんが、全部お任せします。何とかして下さい…」。

支離滅裂の祈りであったが、必死に助けを求めて祈った。

月に一度、サン・フランシスコで持たれていた青年会の日がやってきた。一人ひとり近況報告や証をし、私に順番が廻ってきた。普段なら何気なく切り出せる言葉が、喉に詰まった。深呼吸し、心の中で祈りながら言った。「神さまに示されていた事を告白します」。すると部屋の雰囲気が、一瞬こわばったように感じられた。一気に話し出した。神に示されていながら、今まで隠していた罪の一つ一つを。

特に、ドイツで、カネのために親友を利用し、簡単に見捨ててしまった、貪欲と利己的な罪。その他、愛する某女性を結果的に傷つけてしまったことは、若気の至りとは言え、良心

の大きな痛みとなっていた。
本来なら、洗礼を受ける前に、牧師に悔い改めを促された時、正直に告白しておくべきものだった。しかし、あの時は「こんな事まで知られたら、みっともない。そこまでは言わなくとも構わないだろう」と、いい加減な悔い改めで済ましてしまった。（勿論、何でもかんでも人に告白すれば良いと言うものではない。確かに、神と自分との間だけで秘密にしておかなければならない事柄もある。神の導は千差万別、ワンパターン化することは危険でもある）。
しかし、私の場合には「神の前にも人の前にも告白せよ」と、迫られた。そうでもしないと、私の信仰がはっきりしないことを、神はご存知であったのであろう。顔から火が出るような感じだった。穴があったら入りたい、無ければ掘ってでも入りたい、入ったら二度と出て来たくない心地だった。しかし、誰一人、さげすむ素振りも見せず、黙って聞いてくれた。どうにかこうにか、示されていたことを全部告白することが出来、私にとって、その晩の集会は一生忘れられないものとなった。

びっくり仰天の喜び

それから数日後の、一九七八年二月二十二日 午前0時二十五分。ベッドに入る前に聖書を読んでいた。もう既に、何回も読んでいる箇所で、ローマ人への手紙六章十一節にさしかかった時だった。

突然、「**このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認むべきである**」（口語訳）という言葉が、あたかもその箇所だけに、天から光が当てられたかのように、燦然（さんぜん）と輝いて目に飛び込んできた。今まで視界を遮っていた霧が、一瞬のうちに、突風によって吹き払われてしまったかのようでもあった。すると不思議なことに、今まで味わったことのない喜びが、心の底から、次から次へと湧きあがってきた。何が起こったのか自分でも分からなかった。ただ、「罪が赦された、救われた」という実感が、先のみ言葉と共に心に満ち溢れた。

時間はとうに深夜の一時をまわり「明日の授業の為に、もう寝なけりゃ」と、ベッドに入ったが、その湧きあがる喜びの為に、ちっとも眠れそうになかった。かつて、人を憎んで、その人の顔を思い出すたびに「憎らしくて、憎らしくて」眠れなかったということは、一・二度あったが、喜びの故に「嬉しくて嬉しくて」眠れないという体験は初めてだった。とう

とう一睡もせずに、朝を迎えた。外に出て空を見上げ、周りの木々を見た。一つ一つが、あたかも全く新しく創られたかのように、光り輝いて見えた。まるで別世界のように。

よく、先輩のクリスチャン達が、「私が救われた時、何もかも輝いて見えた」と言う、証を語っていたことを思い出した。その時には、〈そんな馬鹿な事、本当にあるのかよ？〉と半信半疑だった。しかし、彼らの言っていた事が本当だった、とつくづく思わされた。

それ以後、私のうちの何かが変わった。トラクト（宣教の為に書かれた小冊子）を片手に、道で出会う人や、近所の家々を訪問して、イエス・キリストを伝えるようになってしまった。“Do you believe Jesus Christ as your personal Savior ?”（あなたはイエス・キリストを、あなた自身の救い主として信じていますか？）。“Do you go to church ?”（あなたは、教会に行っていますか？）。“Do you know how much God loves you?”（あなたは、神がどれほどあなたを愛しておられるか、ご存知ですか？）。

日本語ですら語った事のないような言葉を、英語で話しながら、巡り歩いた。かつては、こんな事は、カネを貰ってもやりたくない事だった。〈そんなのかっこ悪い。恥ずかしい。他人の事まで面倒みられるか〉と思っていた。

その時私がハウスボーイをしていた家には、「ナターシャ」と言う当時十五才の犬がいた。可愛らしい名前とはおおよそかけ離れた、ブルドックとドーベルマンを足して三で割ったよ

うな、なんとも割り切れない醜い顔をし、その上、皮膚病を患っていた。その犬の世話をするのが、私の仕事の一つだった。

朝晩、ナターシャを散歩に連れ出すのだが、それが一苦労。一キロメートルも歩かないうちに、坐り込んでしまい、引いても押しても動こうとしない事がしょっ中あった。体重は三五キログラム近くあり、抱っこして連れ帰るのは、本当に重労働。また、その犬の小屋が私の部屋の隣にあり、私の部屋は犬の通路になっていた。毎朝、早くから私の部屋に入り込み、「クンクン ワンワン」、そのうるさいこと。時には、ベッドの上にまで這い上がり、まだ寝ている私の顔をペチャクチャなめまわし、「早く起きろ。散歩に連れて行け」と言わんばかりに付きまとった。・・どうせ歩かないくせに。・・

時々、頭に来て、その犬に向かって言った。

「お前は犬。俺は人間様なの。どっちが偉いか考えてみろ。何で、俺がお前に仕えなきゃならないんだよ。分をわきまえろ。 ったく、頭に来る。このブスデブ」。・・何度言っても、ただ短い尻尾を振るだけだったが・・・。…・。この犬がいなかったら、私は雇ってもらえなかったはずだが、人間とは何と勝手なものだろうか。とにかく、私はその犬が「早くいなくなれば良いのに」と内心思っていた。

しかし、あの信じられない喜びを体験してから、その犬まで、いとおしくなってしまった。

「ナターシャ、お前の顔はなんて愛くるしいんだろ。いつまで見てても飽きないよ。親しみを感じるナー。　お前のそのガニ股も、なかなかいいじゃん。愛嬌があってさ。さあ、散歩に行こうか。マイ フレンド」と言うと、犬も、私の余りの激変に戸惑っているかのようだった。

その家に、家政婦として雇われていたメキシコのおばちゃんも、それまでは私の頭痛の種だった。当時六十才前後。元相撲取りの、小錦のお母さんのように太っていた。そのおばちゃんがいつも私の帰りを二階から見張っており、私の姿を見つけると、巨体を揺すりながら駆け下りて来て、ドアを開けるが早いか「スザーム、（ススムと発音できず、いつもスザームと呼んでいた）お帰り」と抱き付き、チューをしようとした。このおばちゃんを如何にかわすか、頭を悩ました。

しかし、このおばちゃんに対しても、「なかなか優しいとこあるじゃん。おばちゃん、長生きしいや」と思うようになってしまった。自分でも不思議で仕方がなかった。

俺、何を言っているんだろう？

ある日の午後、中野牧師と、サンフランシスコからオークランドに向かってベイ・ブリッジを車で渡っている時だった。自分でも信じられないような言葉が、口をついで出た。

「僕、もし神の導きだったら、献身して、牧師になろうと思うんですが・・・」。余り唐突すぎて、中野牧師もハトが豆鉄砲をくらったような顔をした。何故、そんなことをしゃべっているのか、自分でも分からなかった。まるで何かに操られているような感じだった。

それまでは〈どんなに間違っても、牧師にだけはなるまい。給料は安いし、苦労は多いし、その割には報われず、踏んだり蹴ったりの職業だ。自分には絶対向かないし、出来っこない〉と堅く信じていた。出来るなら、貿易でもやって、ひと儲けしようと友人と話し合っていた。

「牧師になろうと思うんですが」とは言ったものの、まさか本当に牧師になるように、導かれるとは思わなかった。ただ、ハウスボーイの仕事にも飽き、一度日本に帰国し、両親の顔を見、カネを貯めて出直そうと思った。

足掛け八年ぶりの日本　即、東京聖書学院に入学

八年ぶりに日本に戻って来た。飛行機が羽田に着いた時には、複雑な心境だった。（当たり前だが、どこへ行っても日本語ばかりなのが奇妙に感じた）。

友人に車で迎えに来てもらい、そのまま東京聖書学院へ向かった。その日は、年会（年に一度、日本ホーリネス教団の牧師達が全国から集まり会議と集会を持つ）の最終日で、宣教大会（クリスチャン達に、福音を伝えるようチャレンジし、牧師や宣教師になる者を募ることを目的とした集会）が開かれるとのこと。

――今思い出しても、帰国したその日に、あの様な集会が開かれる事になっていた事が不思議である。――

着いた時には既に集会は始まっていた。村上宣道牧師が、ユーモアと情熱を傾けて力強く語られた。説教の最後に「誰か、イエス・キリストの為に、また福音宣教の為に、全生涯を献げる者はいませんか？」とチャレンジされた。多くの人達が、そのチャレンジに応えて立ち上がった。

私も〈今が決断の時だな。これ以上、あれやこれや迷っていても仕方がない。こんな者でも神が必要とされるなら、牧師でも何でもいい、働かせて頂こう〉と言う思いが湧き上り、何

者かに背中を押し出されるように立ち上がった。
既に、その学院の入学試験は済んでいた。しかし「ええい、ままよ。当たって砕けろ。神の導きなら扉は開かれるはずだ」との不思議な確信が与えられた。確かに扉は開かれた。小林和夫教授に相談すると、「そうか、君も牧師になる決心をしたか。既に入学試験は終わってしまったが、仮入学で入れてやろう」と話しが決まった。
夢を見ているような、「あれよあれよ」の展開だった。

三十才にして、また一年生

こうして、東京聖書学院に入学することが決まった。故郷に帰り、その事を両親に話した。案の定、反対された。
「牧師になって何をするんだ。牧師なんかじゃ、食べて行けないだろう。嫁さんに来てくれる物好きな人もいないだろうし」等々、親としてみれば当然の心配だった。
「大丈夫、飢え死にするようなことは絶対ないから、心配しなくてもいい。聖書で言う真の神は、決して、信じ従う者を見捨てるような方ではないから」と説得した。余り、納得した

様子ではなかったが、私が一旦言い出したら、たとい誰がなんと言おうと、自分の意志を曲げることがないと察してか、しぶしぶ黙認してくれた。

まだまだ、日本では「牧師」という職業は一般には馴染みが薄く、正しくは理解されていないのだから、無理もなかった。

いよいよ、牧師になる為の学びと訓練が始まった。しかし、持ち金は授業料と寮費の一年分しかなかった。その学院は原則として、全寮制であった為、アルバイトは出来なかった。又、私自身も、もうアルバイトなどするつもりはなかった。もちろん、信仰の無い親に頼るつもりもなかった。

「神は必ず、必要なものは備えて下さるはず」と必死に祈った。

事実、神はその祈りに応えて下さり、アメリカの母教会を通して、毎月必要な金額をサポートして下さった。それでも参考書や、神学書、註解書などを買うと、足りない時がしばしばある。しかし、そんな時でも不思議なように、必要としている金額が、誰からともなく送られてきた。

神は確かに、従う者を豊かに顧みて下さるという事を体験させられた。

目の前が真っ暗になる試練

しかし、想像を超えた悲劇も味わった。一年生の三学期。学期末の最後のテストを受けている最中に母から電話が入った。兄が亡くなったと言う。

「えっ、まさか。そんなバカな」。自分の耳を疑った。全く信じられなかった。取るものも取り敢えず田舎に急いだ。

私の実家は、栃木県の、益子焼で有名な益子町から真岡線で三つほど北に向かった、市塙と言う辺ぴな町だった。東京聖書学院のある東村山から、電車を乗り継ぎ、優に三時間はかかった。

兄の死は事実だった。遺体を前に男泣きする父の姿が、堪らなく哀れだった。母も遺体にすがり付いて泣いた。二人の姉達夫婦も駆けつけて来た。みんな泣いた。私も涙をこらえるのに必死だった。兄と私は一才違いの年子だった。兄が居てくれたお陰で、私は自由奔放に生きられた。

親戚の者が言った。

「これからは、お前が家を継ぎ、親たちの面倒を見るんだぞ。お前は今まで、十分好きなよ

うにやって来たんだから・・」。私も、そう思った。〈もうこれ以上、わがままは許されない。これからは田舎に戻って、親たちの面倒を見ながら、一信徒として、クリスチャン生涯を全うして行こう。どうせ、仮入学だったのだから、仕方がない・・・〉。

神の細き確かな御声

それでも、思った。

〈神の御心は何だろう。これから、一体どうすべきなんだろう〉。

家の裏山に行って、祈った。

「主イエスさま、ご覧のような状態です。なぜ、こんな事が起こったのか分かりません。両親も泣きじゃくっています。折角献身して、牧師になろうとしました。それがあなたの導きだと確信したからです。しかし、これ以上は、見捨てておけません。これからどうしたら良いのでしょう。あなたの導は・・・…」。

しばらく沈黙の時が過ぎた。すると、心の中に思いがけないもみ言葉が響いてきた。

「…だれでも私について来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたし

に従って来なさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしの為に自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分自身を失い、また損したら、なんの得になろうか」。（聖書ルカの福音書 九章二十三節～二十五節 口語訳）

「そんなの無茶です。これ以上出来ません。別なみ言葉を示して下さい」と、必死になって否定した。

しかし、何度繰り返し祈っても、

「だれでも私について来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従って来なさい。」と言うみ言葉が、繰り返し心に迫って来た。家に戻ると、意を決して言った。

「どうしても、今の学びを続け、牧師の道を進みたい」。

……

しばらく、誰も何も言わなかった。

……

ようやく、私の一番上の姉の婿が言った。「分かった。俺達がこっちへ戻って来て、家を継ぎ、親達の面倒をみる。お前は自分の信じる道を行け」。頭が下がった。

悪夢のような大きな辛い試練だった。この事を通して、神に従うことの厳しさと、従う者

を助け支えて下さる神の不思議なみ業を深く体験させられた。
背後では、学院の仲間たちや、アメリカの母教会の人達も祈ってくれていた。この他にもう一つ、身を引き裂かれるような辛さを体験したが、その都度、神は、最もふさわしい慰めと励ましとをもって助けて下さった。

無事卒業、結婚、牧師としての一歩

東京聖書学院での、四年間に亘る学びと訓練の時は、泣いたり笑ったりしながらも、無事終え、卒業の運びとなった。卒業と同時に、牧師として、いずれかの教会に任命されることになっている。その為、年齢の行っている者は、大概、卒業と同時に結婚式を挙げ、任地に赴くケースが多かった。私も在学中から「ふさわしい伴侶を与えて下さい」と祈っていた。（日本の教会の信徒は、七〇パーセント近くが女性である。その様な状況下で、牧師の仕事は、牧師夫人の助けなしには考えられない）。
かつて、両親が「牧師なんぞに嫁に来てくれるような、物好きな女性など、いないんじゃないか」と杞憂したが、幸いにも、神は私に最もふさわしい伴侶を備えて下さっていた。その「物好き」な女性が家内だった。

家内も、私と同じ志を抱き、私より先にその学院で学んでいた。漠然と「こういう人と結婚に導かれたらいいな」と思っていた。彼女は、奇しくも、子供の頃、私の田舎の隣町、茂木町に住んでいたとか。神様も粋なことをなさるものだ。こうして、両親の心配も取り越し苦労に終わった。

かくて、一九八二年三月二九日。家族や学院の教授、同級生、はた又、先輩の牧師達、関係のあった教会の信徒さん達の祝福を受け、無事、結婚式を挙げることが出来た。ハネムーンは、最初の任地、大阪に向かう途上の伊豆半島。熱海で車を借り、半島を一周し三島までやって来た。

三島駅の周辺を散歩し「何とさびれた町だろう」との印象を受けた。

（今、その三島の地で牧会しているのも、神のユーモアか）。次の日、三島から大阪に向かった。

こうして、牧師としての第一歩を踏み出した。

（追想）万事を益に

「あなたにはふさわしい職業は見当たりません」と、コンピューターにも見放され、常に満たされぬ思いを抱きながら、さ迷っていた私だった。

しかし、神は、そんな私さえ拾い上げて下さり、時には、大変と思うことはあるが、やり甲斐のある使命を与えて下さった。

前述したように、世界を放浪している時には、絶えず「北帰行」の「・・夢は空しく消えて 今日も闇をさすらう・・」の歌が心の中に響いていた。

だが、今は、この歌が心に響いてくる。

人生の海の嵐に もまれきし この身も
不思議なる 神の御手により 命拾いしぬ
いと静けき 港に着き われは今安ろう（おりかえし）
救い主 イエスの手にある身はいともやすし（おりかえし）

悲しみと罪の中より 救われしこの身に
誘（いざな）いの声も魂 揺すぶること得じ

すさまじき罪の嵐の　もてあそぶまにまに
死を待つはたれぞ　ただちに逃げこめ港に

（聖歌四七二番）

何とやすらかな日々であろう。

「もし」とか、「何々だったら」とか、と言うことは、ある人にとっては意味の無いことかもしれない。しかし、わたしは思う。

「もし外国へ飛び出さなかったら」、「もし、あの時、かの地で彼女に出会わなかったら」、「もし、アメリカへ行かなかったら」、「もし、日本食を通して教会へ誘われなかったら」、「もし、八年ぶりに帰国したその日に、あの宣教大会が開かれていなかったなら」、「もし、（牧師になろう）と、あの時決意しなかったら」、今頃どうなっていたのだろう。

そして、究極的には、「もし、イエス・キリストと出会わなかったら」。私の人生は？？？多分、未だに放浪と探求の人生か、もしくはあきらめと不満足な人生を送っていることだろう。このように振り返ると、一つ一つの出来事の中にも、恵み深い神の不思議な導があった

事を思わざるを得ない。

長い間抱いていた「人生の目的って何だろう」、「人は死んだらどうなるのだろう」と言う疑問も、イエス・キリストを心から信じた時に、その答を見出した。人は、真の神を信じ、その愛の中で生きるように創造されたのだ。

「人の心には、神だけしか埋める事の出来ない空洞がある」と、フランスの思想家のパスカル（一六二三―六二年）は言う。

又、死に対しても、イエス・キリストを信じる事によって、罪が赦され、永遠の命を与えられる事を知り、解決を見出し平安と確信が与えられた。

他人と比べると、私の人生は大変遠回りしたようにも思われる。

しかし、遠回りをしたことによって、様々なかけがいのない体験をすることが出来、終には、イエス・キリストを私自身の救い主として知ることが出来た。私の青春（晩春？）時代は、一〇〇パーセント燃焼出来た感じがする。

聖書の中に「神の恵みによって、私は今の私になりました」（1コリント一五章一〇節）とあるが、それはまさに私の実感でもある。その神の恵みは、まず、母教会であるサンロレンゾ教会の方々や、中野雄一郎先生御夫妻を通して現わされたことを覚え、ただただ感謝である。

東京聖書学院を卒業する際に、心のふるさととも言うべきアメリカへ戻るべきか否か、随分迷った。しかし、祈りの中で、日本に留まることを示され今日に至っている。この点に関しては、今でも母教会の皆様には申し訳ないと思っている。しかし、これも神の導びき。お赦し頂きたい。

大阪の豊中使徒教会で九年。その後、現在の三島高台キリスト教会で、十二年目を迎え、牧師としての使命に与かってから、早くも二十一年目である。どちらの教会でも、素晴らしい信徒さん達に囲まれ、本当に牧師冥利に尽きる。

時には、昔の友達から、「お前が牧師？ 世も末だな！・・」と冷やかされる事もある。事実その通り、世も末なのだ。それゆえ、神は非常事態とみて、このような者すらも牧師として用いざる得ないのだろう。

あと何年働けるか分からないが、愛する妻や息子と共に、楽しみながら牧師としての生涯を全うしたいものだと思う。

私が自分の証を綴るように示されたのは、一人でも多くの方々に、私が体験した、真の神の恵みを知って欲しいからであり、悔いの無い、充実した人生を送って欲しいからである。

この本を読まれる方の上に、主イエスの愛と恵みが豊かにあるように祈りつつ。

第四部　聖書からの話

「あなたの若い日に」

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また『何の喜びもない。』と言う年月が近づく前に。」（伝道者の書一二章1節　新改訳聖書）

【I】満ち足りた人生を求めて

山本有三の著「路傍の石」の中に、「たった一人しか無い自分を、たった一度しか無い一生を、本当に生かさなかったら、生まれてきた甲斐が無いじゃないか」と言うくだりがあります。誰しもこの言葉を聞くと、「まったくその通りだ。私たちの人生は、たった一度しかない貴重なものだ。また、自分と言う存在も、全世界でたった一人しかいない、かけがいのない存在だ。だから有意義な人生を送りたい、幸せな人生を送りたい」と思うことでしょう。それは古今東西を問わず、全人類共通の願いであると思います。

空しさの中に生きる人々

聖書に、イスラエルの第三番目の王、ソロモン(ＢＣ９６１～９２２在位)の事が記されています。彼の治世、イスラエルは政治経済の絶頂期でした。彼は、当時世界でも最も豪華な宮殿に住み、家来達にかしずかれ、妻七百人、側室三百人に囲まれた、何とも豪勢な暮らしをしておりました。しかし、それにも拘わらず、彼は「空の空、すべては空」と、その心境を述べています。

彼は、その空しい心を満たす為に、様々なことを試みてみました。まず、もっと教養を身につけよう、そしたら心が満足するのではないかと思ったようです。しかし、その結果、彼が悟った事は、「実に、知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識を増す者は悲しみを増す」と言うことでした。次に、快楽を追求してみました。しかし、その結果は「これもまた、何と空しいことか。笑いか、馬鹿らしいことだ。快楽か。それが一体何になろう」でした。更に彼は事業に打ち込むことによって、満足を得ようとしました。しかし、これもまた「私が手がけたあらゆる事業と、その為に私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんとすべてが空しいことよ。風を追うようなものだ。日の下に何一つ益になるものは無い。」と言う惨めなものでした。

彼の悩みは、一見贅沢なようですが、現代の私達の心の真相を表していると思います。

某テレビ局の番組で「宗教への帰依」と言うドキュメンタリーが放映されました。それは主に、ニューヨークの、ビジネスで成功した人達の心の変遷を描いたものでした。彼らは、ビジネスで成功し、富を得たにもかかわらず、空しさを覚え、様々な葛藤の末、最終的には宗教に帰依している、と言う内容でした。

そう言えば、私がロスアンジェルスで、ガーディナー（庭師）のアルバイトをしている時に出会った富豪達の中にも、決して幸せとは言えない人達が多かったことを思い出します。

「人の心には、神だけしか埋めることのできない空洞がある」と、フランスの思想家であり科学者でもあったパスカル（1623年～1662年）は、興味深いことを述べていますが、確かに、私達人間は、他の動物と違い、精神的、霊的な存在であり、真の神による以外には、満たされないものを持っていることを思わされます。

長い間、心から満足出来る、本当の幸せを求めていたソロモン王の得た答は、「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また『何の喜びもない。』と言う年月が近づく前に」でした。

【Ⅱ】神に在る幸せ

真の神について

創造の神

ソロモン王が言っている「創造者」とは神のことです。聖書の一番初めの書き出しは、「初めに、神が天と地を創造した」（創世記一章1節）です。京都の同志社大学の創立者である新島譲は、この言葉にふれた時に、これこそ真の神である、と確信したそうです。

日本には八百万（やおよろず）の神々が祭られていますが、それがどんなに歴史的に由緒あるものであっても、人間「が」造ったものであり、人間「を」造られたお方が真の神です。わずか「が」と「を」の一字違いですが、その意味するところは雲泥の差です。天地万物を創造し、又、私たち人間をも創造された方、それが聖書の教える神です。

愛なる神

更に大切な事は、その神が、私たち一人一人を、かけがいのない存在として愛しておられると言う事です。

幸せな人生の条件、と言うことを考える時、最も大切なことの一つは「愛である」、と言

われます。「人は愛なしには生きられぬ」と言う言葉も良く耳にします。確かに、誰からも愛されず、又、誰一人愛する人がいなくても、「私は幸せだ」と言う人に、一度も会ったことはありません。

愛は、それほど、幸せな人生にとって不可欠な要素であるにも拘わらず、残念ながら、人間の愛は甚だ壊れやすいものです。

私が、サンフランシスコで、二度目のハウスボーイをしていた時の事です。そこの奥さんが友人に、電話で「私の三七年の生涯の中で、彼（夫）との7年間の結婚生活が一番惨めであった」、と話しているのが耳に入ってきました。彼らも“I love You.”“You love me”で結婚したはずです。それにも拘わらず、八年目には別居生活でした。別な家で、三度目ハウスボーイをした時も、やはりそこの奥さんが、ご主人の浮気で悩んでおりました。アメリカの離婚率が、一説によると三〇パーセントにものぼると言うのも、うなずけます。

人間の愛とは何と移ろいやすいものでしょうか。

しかし、神の愛は、永遠に変わりません。聖書の中に、次のように言われています。「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実を尽くしてきた」（エレミヤ三一章1節　口語）。英語の訳では“I have loved you with an

everlasting love.”と表現されています。その意味するところは、「ずっと変わらずにあなたを愛し続けている」と言う意味です。たとい私たちが愛されるに値しないような時にも、それでもなお心変わりせず、心底、私達を愛して下さるのです。

私はかつて、その神の愛を知らず、ただ自己中心に、自分の欲するままに生きて来ました。勿論、神を畏(おそ)れると言う事も知らず、ましてや、神に喜ばれる生き方をしようなどとは考えたこともありませんでした。しかし、今は、確信を持って答えることが出来ます。

「そんな私であったにもかかわらず、神は愛し続けて下さっていた。そして今も、その愛が注がれている」と。

更に、神の愛は無条件に私達を受け入れて下さる愛です。

私たち人間の愛は、必ず条件付きの愛です。それは私たちが結婚相手を選ぶ時のことを考えてみると、良く分かるでしょう。「美人だから」、「背が高いから」、「良い大学を出ているから」、「将来性が有りそうだから」、「気立てが良さそうだら」等々。しかし、その条件が外れると、「こんな筈ではなかった。優しいと思ったのは結婚するまでの事だった。もう、この人とはやって行けない。一生の不作だった。若気の至りだった」等々。悲しいかな、人間の愛

には常に限りがあります。

しかし、神は、私達の欠点や汚れのすべてをご存知であるのに、なお愛して下さるのです。もし私達の今までの全ての行動や、言葉、そして心の中までも、一つ一つ明るみに出されたら、どうでしょうか。正常な感覚を持っている人なら、きっと恥ずかしくて顔を上げられないことでしょう。自分自身に愛想を尽かし、他人からも相手にされなくなるのではないでしょうか。百年の恋も、いっぺんに興ざめです。

しかし、神の愛は無条件の愛です。私達の生い立ちや過去が、たといどんなにひどいものであっても、神はありのままを受け止めて下さり、愛して下さるのです。

今、たくさんの元ヤクザや、元暴走族であったと言う人達が、この神の愛にふれ、クリスチャンとして立ち直って、立派な人生を歩んでおられます。

最後に、神の愛は、単なる言葉だけではなく、具体的な行為によって明らかにされた、真実な愛です。

口先だけの愛では、相手に伝わりません。私は時々、家内に「愛しているよ」と口先だけで言ってしまう事があり、大いに反省しますが、その様な愛では、言われた方もちっとも嬉しくないことでしょう。

しかし、神の愛は「絶えずあなたに真実を尽くし続けてきた」と言われているように、私たちに、真実な行為として表わされて来ました。その事は、実際に体験してみないと分からないことかもしれませんが、私は、自分の人生を振り返ってみる時に、私の人生の上になされた、神の真実な愛のみわざを文字どおり見ることが出来ます。

私は二三才の時に、生き甲斐と人生の目的を求めて、と言う大義名分を掲げて、日本を飛び出しました。しかし、段々落ちぶれ、ヒッピーのなれの果てとなってしまいました。しかし神は、あてもなく放浪していた私を、様々な災から守り、アメリカで、日本食を餌に教会へと導いて下さり、その上、自分でも夢にも思わなかった牧師としての使命をも与えて下さいました。あれから約三〇年、過ぎ去った日々を振り返ると、唯々、神の御真実を思わされます。

ソロモン王も、この神の存在を知り、その愛を悟った時に、初めて心の真の満足を得ました。同様に、私達もこの神の愛を知り、その神の愛に生かされて行く時に、どんな人でも、悔いのない充実した人生を送ることが出来るのです。

《略 歴》

1948 年　栃木県に生まれる。
1967 年　某会社（東京）に就職。
1971 年　退社、日本を飛び出す。
　　ヨーロッパ、アフリカ、中近東を放浪、アメリカへ渡る。
1977 年　サンフランシスコ市立大学卒業。
　　サンフランシスコ州立大学に学ぶ。
1979 年　帰国、東京聖書学院入学
1982 年　東京聖書学院卒業、結婚と同時に大阪府、豊中使徒教会に赴任。
1991 年　静岡県、三島高台キリスト教会に赴任、現在に至る。

《趣 味》

硬式テニス。
あてのないぶらり旅。
ごろ寝読書。

《特 技》

出された物は何でも食べられる。
どこででも眠れる。

世界放浪の果てに

ヒッピーからハッピーへ

５０代牧師の回想録

定価（　　）

2002 年　　月　　日発行

著　者　永山進
発行所　東宣社
〒189－8512 東京都東村山市回田町 1－30－1
℡ 042-391-3696
Fax 042－391―3656

印刷所

乱丁落丁はお取り替えします